

# 美術館を展示する

## 和歌山県立近代美術館のサステナビリティ

Exhibiting the Museum: Sustainability of MOMAW



2020年12月1日—12月20日 和歌山県立近代美術館

## はじめに：ミュージアムとサステナビリティ

Introduction: Museum and Sustainability

近年、「サステナブル Sustainable」や「サステナビリティ Sustainability」という言葉をよく耳にするようになりました。「持続可能（性）」と訳されるその言葉は、経済的な利潤追求のために地球環境や格差の問題を置き去りにしてきたという事実を反省し、これまでの社会のあり方を世界的に見直す必要性を訴えるものです。すでに1987年から使われていた言葉ですが、2015年に国連がSDGs（持続可能な開発目標 Sustainable Development Goals）を定めてから、より身近になりました。このなかには具体的に達成すべき目標が記されており、そのうちのいくつかは、ミュージアムとも直接関わりがあります。

一方で、未来に向けて作品や資料を残すことが使命であるミュージアムは、それ自体がこの先もずっと続いていくこと、つまり「サステナブル」であることを前提としています。しかし例えば自然災害によって、また世界に目を向ければ民族間の争いによっても、前提とすべきサステナビリティは簡単に崩れかねません。また新型コロナウイルスは、世界中の人々の日々の生活と経済活動を危機に陥れ、ミュージアムの運営・経営にも課題を突きつけました。日常的に基本的な仕事を続けられるということの尊さを、昨今の状況を見れば思わずにはられません。

そうした今、社会のサステナビリティにミュージアムはどう関わるのか、またミュージアムとミュージアムのある社会がどのようにして持続するのかを考えることが、未来のために必要となっています。この展覧会はそのためのヒントを、日本の公立美術館の中では比較的早く、すでに50年という時間を持続させてきた当館の活動に探そうとする試みです。まずは展覧会のはじまりに、美術館を含むミュージアムがどのような場所だと考えられているのか、日本と世界のかたちをご紹介します。そして世界の中の、日本の中の、和歌山の中の美術館として当館の役割を考え、また社会全体との関係を探るきっかけを見出したいと思います。

## 美術館・博物館とミュージアム：

### 博物館法とICOM規約から

美術館は博物館の一種です。日本では「博物館法」という法律があり、美術館や歴史博物館に加えて、植物園や動物園、水族館の活動を定めています。この法律は、「社会教育」、つまり学校以外の場所で、年齢にかかわらず、誰もが学びの機会を得られるように制定されたものです。美術館を含めた博物館施設は、前提として教育の場であることは、広く知っていただきたい事実です。

しかしここでの教育活動は、資料を集め、保存し、次の世代に引き継ぐという、博物館でなければできない仕事に基づいています。時代を超えて作品や資料を守り、広く社会で共有することが、博物館における学びの土台です。

一方で、美術館や博物館は、英語では「ミュージアム」と呼ばれます。もともとはヨーロッパにおいて、王侯貴族らが珍しいものを集め、それらを時々公開したことが始まりでした。しかし文化遺産という考え方が定着した現代においては、それらは社会の共有財産と位置付けられています。特に二度にわたる世界大戦によって文化遺産が破壊の脅威に晒された反省から、第二次大戦後すぐの1946年にはICOM（国際博物館会議）が、国をまたいだ文化遺産の保護と振興を目的に組織され、現在は世界138の国と地域から44,500人のミュージアム関係者が参加するNGO（国際的非政府組織）として、各国と連携しています。

世界中にはさまざまな種類のミュージアムがあり、それぞれが人間の多様な文化や自然の価値を守るために日々、活動しています。美術館はそのなかのひとつであり、各地域の美術館として独自に存在すること自体が、多様な価値を守ることにつながっています。

展示室の壁面には、上段に日本の博物館法を、下段にはICOMの規約における博物館／ミュージアムの定義を記しました。それらと、みなさんの美術館のイメージとを比べてみてください。

## SDGsとミュージアム

人類は近代以降、それまでとは比べ物にならない速度で文明を発展させてきました。電車、車、飛行機などの移動手段を持ち、最近では通信手段も発達して、世界中の人々が交流することができるようになりました。しかし発展にばかり目を向け、自然環境やエネルギーの問題を置き去りにしてきたことが、それらを原因とする急速な気候変動などによって明らかになってきました。加えて、地域や人種間の格差もまた、発展の影に隠れがちな問題です。

世界中の国や行政組織は、こうした問題に積極的に取り組む責任があります。そうでなければ、きっと未来の人類は今と同じ生活を送ることができなくなるでしょう。けれども私たち一人ひとりがこうした問題に対して「自分には関係がない」と目を逸らさず、課題を理解し、意識を高めていくことが最も大切です。

SDGsには、17の大きな目標があり、具体的なターゲットとして169項目が挙げられています。美術館はこれらのうち、「4 教育」に最も強く関わっていますが、貧困から抜け出す最大の手段が教育であるならば、「1 貧困撲滅」の目標にもつながります。たくさんのエネルギーを用いて建物を維持管理することを思えば、「7 クリーンエネルギー」や「13 気候変動」にも責任があります。そして過去、現在を通じて未来へと人間の文化と記憶をつないでいく公共的な存在としての役割には、「16 平和と公正」の目標が条件として達成されることが必要です。

### 博物館法より抜粋

「博物館」とは、歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする

### ICOM規約（2007）より抜粋

ミュージアムとは、社会とその発展に貢献するため、有形、無形の人類の遺産とその環境を、研究、教育、楽しみを目的として収集、保存、調査研究、普及、展示をおこなう公衆に開かれた非営利の常設機関である。

*A museum is a non-profit, permanent institution in the service of society and its development, open to the public, which acquires, conserves, researches, communicates and exhibits the tangible and intangible heritage of humanity and its environment for the purposes of education, study and enjoyment.*







# 1. 和歌山県立近代美術館の50年+α

50+ Years of the Museum of Modern Art, Wakayama

「和歌山県立近代美術館」は、現在も県庁の前にある和歌山県民文化会館の1階に、1970年に開館しました。そこで23年余りの活動続け、1994年から現在の建物に移り、早くも26年が過ぎました。

開館時に「近代美術館」という名前がつけられたのはなぜでしょうか。実はそれ以前の1963年から7年間、「和歌山県立美術館」という名前の施設が、現在の和歌山城二の丸跡にありました。はじめは収蔵庫もなく、展示のためだけの施設でしたが、和歌山ゆかりの作家を調査し、展覧会で紹介、さらにその作品の収集も行っています。しばらくして収蔵庫も増設され、作品を保存するというミュージアムとしての最低限の機能が整えられました。

県立美術館時代には近世以前、つまり江戸時代までの美術の展覧会も開催されています。しかし当時はすでに美術の概念が大きく広がっており、1929年にその名も「近代美術館 The Museum of Modern Art」がニューヨークに開館して以来、近代＝同時代の美術を体系的な視点をもって紹介することが、世界的に注目されるようになっていました。日本においてこうした動きが始まるのは戦後のことで、1951年に最初の近代美術館として神奈川県立近代美術館が、翌1952年に国立近代美術館（現・東京国立近代美術館）が、そして1963年には国立近代美術館京都分館（現・京都国立近代美術館）が開館します。その流れを汲み、1970年10月に兵庫県立近代美術館（現・兵庫県立美術館）が開館し、1か月遅れで和歌山県立近代美術館が国内5番目の近代美術館として開館することになりました。和歌山県の近世以前の美術は、翌1971年に和歌山県立博物館が開館して引き継いでいきます。

それぞれの時代にあわせて少しずつ変化しながらも、展覧会の歴史やコレクションの歩みを見ると、当館は常に一貫した活動を行ってきたことがわかります。ここではポスターや刊行物を中心に、3つの美術館の変遷をたどります。



## 展覧会ポスター

1963年に開館した和歌山県立美術館、1970年に県民文化会館1階に開館した和歌山県立近代美術館(旧館)、そして1994年に現在の地に開館してからの和歌山県立近代美術館(新館)では、数々の展覧会が開催されてきました。

ここでは、現在までに制作されたポスターによって展覧会を振り返ります。ポスターが制作できなかった展覧会などもありますので、詳細な展覧会の開催歴は以下の年表をご覧ください。振り返ってみますと、川口軌外や石垣栄太郎など同じ作家の名前や作品の図版が繰り返しポスターに登場していることがわかります。和歌山ゆかりの美術家たちの調査研究を継続し、展覧会での紹介を軸に活動を続けてきた当館の一貫した姿勢が、ポスターからも垣間みることができるのではないのでしょうか。



県立美術館時代からのポスター 撮影＝長岡浩司

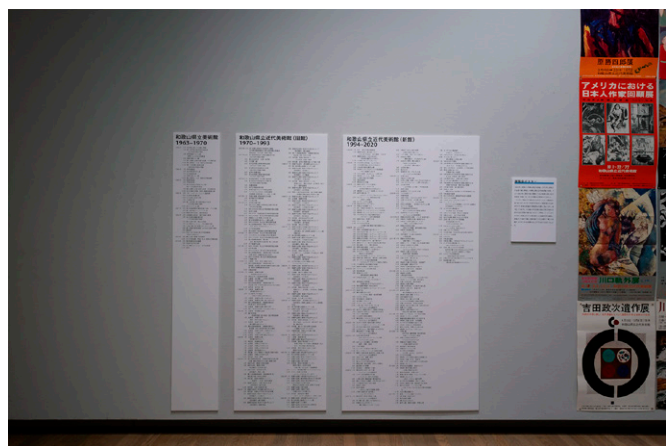
## 『美術館だより』

### 『和歌山県立近代美術館ニュース』

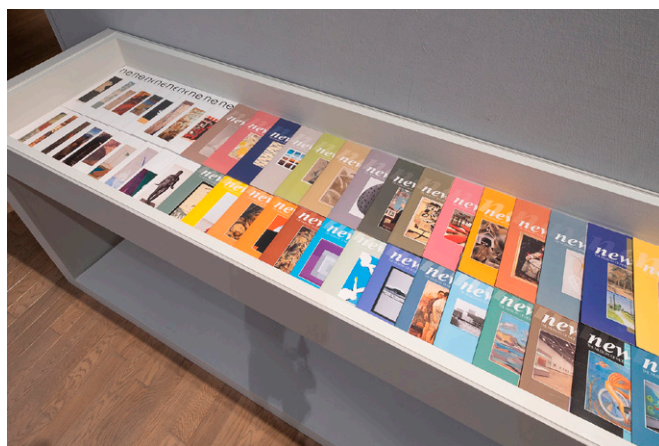
和歌山県立美術館が開館してから2年後の1965年12月1日、友の会の発足にあわせて「美術館だより」は創刊されました。毎月1回のペースで発行された「美術館だより」は、和歌山県立近代美術館にも引き継がれ、計339号まで継続しました。そして1994年7月に新館が開館されるのにあわせて、「和歌山県立近代美術館ニュース」としてリニューアルします。カラーページが追加され、年4回季節ごとに発行される季刊誌となり、現在103号まで続いています。その時々々の美術館活動をリアルタイムで物語る資料であり、掲載された作家のテキストなども貴重です。



各時代の細かな活動を記録する『美術館だより』



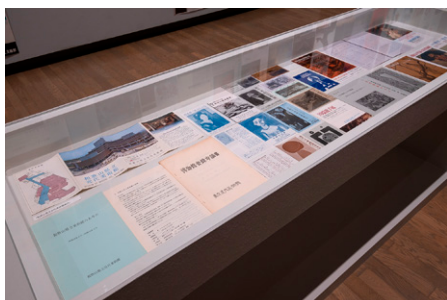
県立美術館時代、近代美術館(旧館)時代、近代美術館(新館)時代の展覧会歴



近年の『和歌山県立近代美術館ニュース』は、図版も豊富に、展覧会の報告記事が中心となっている



県立美術館が開館したときのアルバムや案内パンフレット等



登録博物館として申請したときの書類も残されている



1994年に新館に移ってから2020年までのカレンダー



# 和歌山県立美術館 1963-1970

■1963年  
3月 旧和歌山城二の丸跡に開館  
3月 第1回和歌山県美術家協会展（1970年第8回展まで開催）  
4月 世界美術アルバム展・世界の人々の生活写真展  
6月 国際写真サロン展  
7月 第1回郷土出身大家作品展 川口軌外展  
10月 第1回明治・大正・昭和名作美術展  
11月 第17回和歌山県美術館（1969年第23回展まで開催）

■1964年  
1月 世界国旗展  
2月 全日本写真サロン展  
4月 紀州陶磁器展

# 和歌山県立近代美術館（旧館）1970-1993

■1970年  
11月2日 和歌山県民文化会館内に開館  
近代美術館開館記念 第24回和歌山県美術展特別展（1993年第47回展まで開催）

■1971年  
2月 第4回美術館友の会実技講座習作展（1975年第9回展まで開催）  
3月 郷土出身作家 大夢・晩花展  
4月 竹久夢二展  
6月 第9回和歌山県美術家協会展（1993年第31回展まで開催）  
8月 第6回近代美術館友の会展（1992年第27回展まで開催）  
8月 紀州の風景画展  
9月 第4回和歌山県勤労者美術展（1975年第7回展まで開催）

■1972年  
1月 館主催常設展（浜口陽三版画展）  
2月 第5回近代美術館友の会習作展（1975年第9回展まで毎年開催）  
3月 原勝四郎展  
4月 現代日本絵画秀作展  
7月 新収作品を中心とする常設企画展  
10月 アメリカにおける日本人作家回顧展（国吉康雄・石垣栄太郎・ヘンリー・杉本三人展）

■1973年  
1月 常設企画展（原勝四郎の日本画）  
3月 地中海の古代美術展  
10月 川口軌外展

■1974年  
4月 吉田政次遺作展  
6月 昭和49年度 和歌山市美育協会春の写生展（1975年まで毎年開催）  
7月 昭和49年度前期 県立近代美術館常設企画展  
10月 裕伊之助展  
12月 昭和49年度 県高校総合芸術祭書道美術展

■1975年  
1月 昭和49年度後期 県立近代美術館常設企画展  
3月 館蔵品による〈和歌山の作家〉展  
3月 第35回国際写真サロン入選作品展  
4月 昭和50年度前期 県立近代美術館常設展  
5月 第2回移動美術館—和歌山の作家を中心として—（会場：御坊市・紀州信用金庫大ホール）  
10月 木下孝則回顧展  
12月 第23回県下高校総合芸術祭書道美術展

■1976年  
1月 昭和50年度後期 県立近代美術館常設展  
2月 1910年代における京都日本画の新動向  
4月 昭和51年度前期 県立近代美術館常設企画展  
5月 第3回移動美術館 橋本展（会場：橋本市教育文化会館4階 第4～5展示室）  
10月 木下義謙作品展

■1977年  
1月 昭和51年度後期 県立近代美術館常設企画展  
2月 田中恭吉展  
4月 昭和52年度第1期 県立近代美術館常設展  
6月 第4回移動美術館 移動美術館'77 有田展（会場：有田市・安謐橋会館6階大集会室）

4月 国際写真サロン展  
10月 第2回明治・大正・昭和名作美術展  
■1965年  
3月 祇園南海展  
5月 芦雪名作展  
7月 第25回全日本写真サロン展・第21回全関西写真展  
7月 第2回郷土出身大家作品展 日高昌克展  
10月 近代洋画名作展 特設 原勝四郎遺作展

■1966年  
3月 ダリ・シャガール・ピュッフェ版画展  
6月 石垣栄太郎遺作展  
6月 日本伝統工芸秀作展

7月 昭和52年度第Ⅱ期 県立近代美術館常設展  
10月 川端龍子展

■1978年  
4月 企画展 洋画・彫刻・版画の世界  
6月 第5回移動美術館 移動美術館'78 橋本展・有田展（会場：橋本市教育文化会館4、5展示室／有田市・安謐橋会館6階大集会室）  
10月 日高昌克展

1979年  
1月 企画展 館蔵作品展—新収蔵作品を中心として—  
2月 神中糸子と工部美術学校展  
4月 企画展 浜口陽三・吉田政次版画展  
5月 特別展 村井正誠展  
6月 第6回移動美術館 移動美術館'79 田辺展（会場：紀州信用金庫田辺支店2階大会議室）  
10月 特別展 高井貞二展

■1980年  
1月 企画展 館蔵作品展—新収蔵作品を中心として—  
3月 川口軌外とその周辺—和歌山の初期独立立案系作家たち—  
4月 企画展 館蔵作品展—日本画の世界—  
5月 企画展 館蔵作品展—洋画・彫刻の世界—  
6月 第7回移動美術館 移動美術館'80 串本展（会場：串本町立体育館）  
7月 企画展 館蔵作品展—版画の世界—  
10月 開館10周年記念特別展 1930年協会の作家たち

■1981年  
1月 企画展 新収蔵作品展  
3月 春の特別展 恩地孝四郎・田中恭吉・逸見享版画展  
4月 企画展 洋画の世界・滞欧・滞米作品を中心として・  
5月 企画展 版画の世界・新収蔵作品を中心として・  
6月 第8回移動美術館 移動美術館'81 御坊展（会場：紀州信用金庫4階大会議室）  
8月 企画展 洋画の世界—人物画を中心として—  
10月 特別展 下村観山—その人と芸術—  
10月 企画展 洋画の世界・戦前の作品より

■1982年  
1月 企画展 館蔵作品展—新収蔵作品を中心として—  
2月 特別展 建畠覚造展  
4月 企画展 和歌山の作家たちⅡ  
5月 企画展 和歌山の作家たちⅢ  
7月 企画展 現代版画の8人  
7月 特別展 イタリア美術の一世紀展〈1880-1990〉  
8月 企画展 和歌山の作家たちⅣ  
10月 特別展 稗田一穂展

■1983年  
3月 第9回移動美術館 移動美術館'82 橋本展（会場：橋本市教育文化会館4階展示室）  
4月 館蔵作品展Ⅰ 戦後の洋画と版画  
4月 館蔵作品展Ⅱ 戦前の洋画〈特別陳列—石垣栄太郎〉  
5月 館蔵作品展Ⅲ 日本画の世界〈特別陳列—稗田一穂〉  
5月 第10回移動美術館 移動美術館'83 串本展（会場：串本町立体育館）  
7月 特別展 関西の美術家シリーズ1—津高和一・泉茂・吉原英雄展

7月 川端龍子展  
8月 第1回和歌山県立美術館友の会展（1970年第5回展まで開催）  
10月 松方コレクション展

■1967年  
4月 第4回国際青年美術家展・日本／アメリカ展  
8月 第1回和歌山アンデパンダン展  
10月 開館五周年記念 富岡鉄斎展

■1968年  
2月 収蔵庫完成記念 現代洋画大家展  
2月 友の会実技講座習作展（1970年第3回展まで開催）  
3月 郷土出身作家 桑山玉洲展  
4月 吉川観方コレクション 浮世絵総合展

8月 館蔵作品展Ⅳ 洋画・彫刻の世界〈特別陳列—創作版画〉  
10月 特別展 日本の洋画秀作展

■1984年  
1月 館蔵作品展Ⅴ 新収蔵作品を中心として  
2月 特別展 和歌山の作家と県内洋画壇  
4月 館蔵作品展Ⅰ 戦前の作品を中心として〈特別陳列—川口軌外〉  
4月 館蔵作品展Ⅱ 戦前の作品を中心として〈特別陳列—創作版画〉  
5月 館蔵作品展Ⅲ 戦後の作品を中心として〈特別陳列—建畠覚造〉  
8月 館蔵作品展Ⅳ 戦後の作品を中心として〈特別陳列—現代版画〉  
8月 第11回移動美術館 移動美術館'84 田辺展（会場：紀南文化会館）  
7月 特別展 関西の美術家シリーズ2—元永定正・白髪一雄展  
10月 特別展 紀州の風景を描いた作家たち展

■1985年  
1月 館蔵作品展Ⅴ 新収蔵作品を中心として  
3月 第1回和歌山版画ビエンナーレ展  
4月 館蔵作品展Ⅰ 戦前の作品を中心として〈特別陳列—高井貞二〉  
4月 館蔵作品展Ⅱ 戦前の作品を中心として〈特別陳列—木下義謙〉  
5月 館蔵作品展Ⅲ 戦後の作品を中心として〈特別陳列—玉置正敏〉  
7月 特別展 関西の美術家シリーズ3 彫刻の4人—清水九兵衛・山口牧生・森口宏一・福岡道雄展  
8月 館蔵作品展Ⅳ 戦後の作品を中心として〈特別陳列—深沢幸雄〉  
10月 開館15周年記念特別展 近代洋画の展開—初期独立美術協会の作家たち展

■1986年  
1月 館蔵作品展Ⅴ 新収蔵作品を中心として  
3月 企画展 館蔵秀作展  
4月 館蔵作品展Ⅰ 新収蔵作品を中心として〈特別陳列—川口軌外〉  
4月 館蔵作品展Ⅱ 戦前の作品を中心として〈特別陳列—大正期の日本画〉  
5月 館蔵作品展Ⅲ 戦前の作品を中心として〈特別陳列—創作版画〉  
7月 館蔵作品展Ⅳ 戦後の作品を中心として〈特別陳列—現代彫刻〉  
7月 特別展 朝井閑右衛門の世界  
8月 館蔵作品展Ⅴ 戦後の作品を中心として〈特別陳列—現代版画〉  
10月 特別展 瑛九とその周辺

■1987年  
1月 館蔵作品展Ⅵ 新収蔵作品を中心として  
2月 館蔵作品展Ⅶ 戦後の作品を中心として〈特別陳列—第1回和歌山版画ビエンナーレ展受賞作品〉  
3月 第2回和歌山版画ビエンナーレ展  
4月 館蔵作品展Ⅰ 戦前の作品を中心として〈特別陳列—大正期の日本画〉  
4月 館蔵作品展Ⅱ 戦後の作品を中心として〈特別陳列—稗田一穂〉  
7月 館蔵作品展Ⅲ 戦後の作品を中心として〈特別陳列—現代彫刻〉  
7月 特別展 関西の美術家シリーズ4 日本画の4人—大野敬嵩・下村良之介・星野真吾・三上誠展  
7月 館蔵作品展Ⅳ 戦前の作品を中心として〈特別陳列—創作版画〉  
9月 太平洋を越えた日本の画家たち展 アメリカに学んだ18人

■1988年  
1月 館蔵作品展Ⅴ 新収蔵作品を中心として  
2月 館蔵作品展Ⅵ 戦後の作品を中心として

7月 1968（第2回）和歌山アンデパンダン展  
9月 第1回勤労者美術展（1970年第3回展まで開催）  
9月 扇絵展  
10月 明治100年記念 郷土作家回顧展 明治から現在まで

■1969年  
4月 郷土出身大家展 保田龍門  
10月 文化庁巡回展 明治・大正・昭和名作美術展

■1970年  
2月 県美術家協会色紙展  
3月 京都の近代日本画  
4月 吉川観方コレクション 日本女装展  
11月 席館

〈特別陳列—現代版画〉  
3月 企画展 描かれた動物たち展  
4月 館蔵作品展Ⅰ 新収蔵作品を中心として〈特別陳列—川口軌外〉  
5月 館蔵作品展Ⅱ 戦後の作品を中心として〈特別陳列—建畠覚造〉  
7月 館蔵作品展Ⅲ 戦前の作品を中心として〈特別陳列—創作版画〉  
7月 特別展 関西の美術家シリーズ5 版画の4人—井田照一・木村光佑・黒崎彰・松井裕  
8月 館蔵作品展Ⅳ 戦後の作品を中心として〈特別陳列—現代版画〉  
10月 特別展 竹久夢二とその周辺

■1989年  
1月 館蔵作品展Ⅴ 新収蔵作品を中心として〈特別陳列—和歌山版画ビエンナーレ展受賞作品〉  
3月 第3回和歌山版画ビエンナーレ展  
4月 館蔵作品展Ⅰ 戦前の作品を中心として〈特別陳列—創作版画〉  
5月 館蔵作品展Ⅱ 戦後の作品を中心として〈特別陳列—現代版画〉  
7月 館蔵作品展Ⅲ 戦後の作品を中心として  
7月 特別展 関西の美術家シリーズ6 現代の造形—土と布と糸 荒木高子・前川強・濱谷明夫  
10月 特別展 親と子で見る世界の名画展—印象派からモダンアートまで—  
12月 移動美術館 和歌山の作家たち展（会場：串本町立体育館）

■1990年  
1月 館蔵作品展Ⅳ 新収蔵作品を中心として  
3月 企画展 館蔵秀作展  
7月 館蔵作品展Ⅰ 戦後の作品を中心として  
7月 特別展 関西の美術家シリーズ7 美術の現在—4つの試み 宮崎豊治・北山善夫・木村秀樹・野田裕示展  
10月 特別展 現代の陶芸 1980—1990 関西の作家を中心として

■1991年  
1月 館蔵作品展Ⅱ 新収蔵作品を中心として  
3月 第4回和歌山版画ビエンナーレ展  
4月 館蔵作品展Ⅰ 戦後の作品を中心として  
5月 館蔵作品展Ⅱ 戦前の作品を中心として  
7月 館蔵作品展Ⅲ 現代版画  
8月 特別展 関西の美術家シリーズ8 美術の現在—彫刻の宴客 小清水漸・北辻良史・川島慶樹展  
9月 サントリー美術館所蔵グランヴィルコレクション  
9月 ホスター芸術100年展—ロートレックからホックニーまで—

■1992年  
1月 館蔵作品展Ⅳ 新収蔵作品を中心として  
4月 館蔵作品展Ⅰ 建畠覚造と戦後日本の彫刻家  
5月 館蔵作品展Ⅱ 関西の戦後美術を中心として  
5月 田辺市制施行50周年記念 移動近代美術館（会場：紀南文化会館）  
7月 館蔵作品展Ⅲ 現代版画  
8月 館蔵作品展Ⅳ 戦前の洋画—和歌山ゆかりの作家たち—  
10月 特別展 版画芸術の饗宴—ケネス・タイラーと巨匠たち：1963-1992

■1993年  
1月 館蔵作品展Ⅴ 新収蔵作品を中心として  
3月 第5回和歌山版画ビエンナーレ展  
4月 館蔵作品展Ⅰ 川口軌外  
5月 館蔵作品展Ⅱ 石垣栄太郎と原勝四郎  
7月 館蔵作品展Ⅲ 現代版画



## 和歌山県立近代美術館（新館） 1994-2020

### ■1994年

- 7月8日 新近代美術館開館
- 7月 開館記念展1 美術館へ行くこう COLLECTIONS! 近代美術／100年
- 10月 開館記念展2 大正のまなざしー若き保田龍門とその時代ー
- 11月 小企画展 ルオーの「ミゼレーレ」

### ■1995年

- 1月 特別展 恩地孝四郎一色と形の詩人ー小企画展 和歌山ゆかりの作家たち
- 2月 1994年度新収蔵作品展
- 4月 特別展 ヴィクトリア&アルバート美術館展ーイギリス絵画の350年
- 7月 村井正誠展 色と形と心ー人間の詩
- 8月 美術館に行ったよ!ー風景ってなあにー
- 8月 小企画展 日本の近代版画
- 9月 保田春彦展
- 10月 野田裕示近作展

### ■1996年

- 1月 線画の世界ーかたりの表現ー
- 2月 ひかる・うごく・おとがする 20世紀の静かならざる作品たち
- 4月 美術館へいったら!?「絵画」というしくみ
- 6月 紀伊半島を歩いてーロジャー・アックリング&ハミッシュ・フルトン
- 8月 モスクフ、プーシキン美術館名作展ー室内への視線ー
- 9月 ホックニーのグリム童話
- 11月 日本のグラフィックデザイン

### ■1997年

- 1月 和歌山の版画家10人
- 3月 新しい関西の美術家たち ものとあらわれ
- 4月 美術館へ行ったよ! コレクションにみる東京
- 5月 美術館へ行ったよ! コレクションにみるパリ
- 7月 アルザスとフランス近代美術の歩みーストラスブール近代美術館展
- 8月 版画の技法・表現の手法
- 10月 マリノ・マリニ展
- 11月 アメリカの中の日本ー石垣栄太郎と戦前の渡米画家たちー

### ■1998年

- 1月 心のかたち
- 2月 泉茂ー初期版画作品を中心にー
- 4月 世紀末芸術の華ーオーブリー・ビアズリー展
- 5月 日本の近代版画ーコレクション・ダイジェスト1
- 6月 日本の近代版画ーコレクション・ダイジェスト2
- 9月 和歌山の日本画ーコレクション・ダイジェスト3
- 8月 静けさの芸術なかから 星の贈りもの
- 10月 意味とイメージーあらわれる浪漫主義の明治
- 12月 眼と精神ーフランス現代美術展

### ■1999年

- 2月 関西の戦後美術 1950'sー1990's
- 4月 めいさく根掘葉掘 アートと知り合い!
- 6月 デモクラート 1951ー1957 開放された戦後美術
- 7月 日本の近代版画 コレクション・ダイジェスト4
- 8月 熊野の音+熊野の色 増田感・北聖吉彦展
- 9月 サンフランシスコ近代美術館展ーカリフォルニア・アートシーン 1920's-1930's
- 11月 川口軌外展 ある洋画家の軌跡
- 12月 越境する想像力ー素材との出会い

### ■2000年

- 2月 コレクションにみる芸術と社会
- 4月 田中恭吉展
- 5月 定規とコンパス?ー幾何学図形と美術の表現
- 7月 印象派の巨匠 シスレー展ーイール・ド・フランスの光を愛して
- 9月 東欧絵本の世界展ー国境を越える子どもたちのためのアート
- 11月 現代版画の軌跡ーゆめとめざめ
- 12月 日本の近代版画4 コレクション・ダイジェスト

### ■2001年

- 2月 版画今昔
- 4月 夢の世界のおくりものーアンデルセン童話・絵本原画展
- 5月 うごけば、かわる。
- 8月 宇佐美圭司・絵画宇宙
- 9月 浜口陽三へのオマージュ
- 10月 マックス・エルンスト展
- 12月 一期一会ーであう めでる つたえる コレクションによる全館展示

### ■2002年

- 4月 あたらしい画面を求めてー関西の半世紀ー
- 5月 「生活」を「芸術」として 西村伊作の世界
- 7月 アンジェ美術館展
- 9月 山本容子の美術遊園地
- 11月 美術百科「この人のこの1点」の巻 コレクションによる全館展示

### ■2003年

- 4月 はじめての美術・絵本原画の世界展
- 6月 チャベック兄弟とチェコ・アヴァンギャルド展
- 7月 近代日本洋画の巨匠 黒田清輝展
- 9月 たがやすようにー熟す画面の4つのかたち
- 12月 美術百科「7つの鍵」の巻 コレクションによる全館展示

### ■2004年

- 4月 和歌山県特別事業 日本に向けられたヨーロッパ人の眼・ジャバントウティ vol.6
- 4月 atW vol.1 永坂嘉光・鈴木理策 高野一熊野 聖地
- 6月 小野竹喬展
- 7月 ビノッキオ その誕生から現代まで
- 11月 チャールズ&レイ・イームズ 創造の遺産

### ■2005年

- 1月 開館10周年記念 美術百科「版画」の巻 コレクションによる全館展示
- 4月 没後10年 遺業・泉茂
- 6月 世界の版画名品選
- 7月 夏休み わかやま美術探偵団
- 7月 関連企画 鈴木昭男 点音 in 和歌山
- 9月 版画家たちの表情
- 11月 佐伯祐三ー芸術家への道ー

### ■2006年

- 1月 美術百科「世界一周」の巻 コレクションによる全館展示
- 4月 ベトナム近代絵画展 花と銃ーインドシナ・モダンの半世紀
- 4月 小特集 追悼・建畠造造+新収蔵作品
- 6月 現代「日本画」の展望ー内と外のあいだでー
- 7月 小特集 野田裕示+鈴木理策
- 9月 森鷗外と美術
- 11月 科学の感情ーあたらしい時代の感覚と表現ー
- 11月 小特集 没後20年 高井貞二ーニューヨークのタカイ

### ■2007年

- 1月 美術百科「前衛の関西」の巻 コレクションによる全館展示
- 4月 竹久夢二展ー描くことが生きることー
- 4月 特集展示 大正デカダンス「夢二学校」+「テルマ・ハンカ」
- 6月 特集展示 うるわしき技の世界 近現代美術の達人たち
- 6月 ふだん美術ー日常へ向けた目と心ー
- 7月 relations 関係ー藤本由紀夫／FUJIMOTO and
- 7月 relations 関係ー藤本由紀夫／happy conceptualー杉山知子+藤本由紀夫
- 9月 水彩画の魅力
- 10月 森のなかで
- 12月 美術百科「色・いろいろ」の巻 コレクションによる全館展示

### ■2008年

- 4月 叙情の様式
- 4月 特集展示 石垣栄太郎
- 6月 共作×共鳴×共感ーともに作られた作品たち
- 7月 ルオーの〈ミゼレーレ〉ー人間へのまなざしー
- 9月 点と面の詩情ー上前智祐・山中嘉一・坪田政彦展
- 11月 彼岸の美術
- 12月 美術百科「この人はだれ」の巻

### ■2009年

- 4月 アメリカをめぐる
- 4月 原勝四郎展
- 6月 油絵の理由ー「あぶらえ」は好きですか?
- 7月 生誕100年記念 浜口陽三展
- 7月 サマー・ミュージアムーわかやま発見ー
- 9月 自宅から美術館へ 田中恒子コレクション展
- 9月 コレクション名品展
- 11月 世界遺産登録5周年記念 描かれた紀伊山地の霊場と参詣道
- 12月 美術百科「ここはどこ」の巻 コレクションによる全館展示

### ■2010年

- 4月 開館40周年記念展I ようこそ 彫刻の森へ
- 4月 特集展示 宇佐美圭司展ー絵画の歩み
- 7月 特集展示 大亦新治郎のスケッチからー明治・大正の和歌山のまち
- 9月 開館40周年記念展II 日本近代の青春 創作版画の名品
- 10月 特集展示 保田春彦展 近作デッサンを中心に
- 11月 【特別事業】平山郁夫追悼展示、小沢道治展

### ■2011年

- 1月 開館40周年記念展III 油絵の魅力 イズムを超えて
- 3月 版画の「アナ」ガリ版がつなぐ孔版画の歴史
- 3月 特集展示 吉田政次の世界展
- 4月 ポップ? ポップ! ポップ♡ コレクションに見るポップなアートの50年
- 6月 特集展示 生誕120年記念 恩地孝四郎・藤森静雄
- 7月 なつやすみの美術館「みること」「うつすこと」
- 9月 生誕100年 高井貞二展ー「昭和」を描いた人ー
- 9月 特集展示 生誕120年記念 保田龍門
- 11月 吉原英雄展 画家のドラマ
- 12月 特集展示 吉原英雄を囲む作家たち
- 12月 特集展示 生誕130年 日高昌克

### ■2012年

- 2月 ホックニーのグリム童話
- 3月 特集展示 井田照一
- 4月 人間と自然の美術
- 6月 なつやすみの美術館2 かたちと色のABC
- 6月 特集展示 なつやすみ特集 野田哲也
- 9月 生誕120年記念 田中恭吉展
- 9月 特集展示 幻想の美術
- 11月 生誕120年記念 川口軌外の歩み展
- 12月 特集展示 没後70年 建畠大夢

### ■2013年

- 2月 謄写版の冒険 卓上印刷器からはじまったアート
- 3月 特集展示 版画・図案・オブジェ
- 4月 日本の絵画の50年
- 6月 特集展示 瑛九:紙の上の仕事
- 7月 なつやすみの美術館3「美術の時間」
- 9月 生誕120年記念 石垣栄太郎展
- 9月 特集展示 没後100年 香山小鳥:ゆめの日のかけ
- 12月 物質【モリ】と美術
- 12月 特集展示 人間と宇宙のドラマ: 吹田文明・堀井英男・長岡國人

### ■2014年

- 2月 版画について考えるー101年目の宿題
- 3月 特集展示 モノクロームの世界
- 4月 建畠造造と戦後の彫刻 かたちをさぐる
- 6月 特集展示 生誕120年 大亦親風
- 7月 なつやすみの美術館4 生きている!
- 9月 特集展示 没後50年 野長瀬晩花
- 11月 観光する美術 和歌山から始まる旅
- 12月 特集展示 コレクション／ドネーション

### ■2015年

- 1月 「月映」展 田中恭吉・藤森静雄・恩地孝四郎 木版にいのちを刻んだ青春
- 3月 和歌山と関西の美術家たち リアルのリアルのリアル
- 3月 特集展示「版画」の明治ー印刷と美術のはざままで
- 5月 保田龍門・保田春彦展
- 6月 特集展示 くりかえしの美
- 7月 なつやすみの美術館5 つぶやき おはなし ものがたり
- 9月 ここだけの日本画
- 9月 特集展示 アメリカ移民の歴史と芸術家たち
- 9月 特集展示 生誕120年 逸見享
- 12月 生誕110年 村井正誠展 ひとの居る場所
- 12月 特集展示 光について

### ■2016年

- 3月 宇佐美圭司回顧展 絵画のロゴス
- 3月 特集展示 謄写印刷工房からー印刷と美術のはざままで
- 4月 恩地孝四郎展 抒情とモダン
- 4月 関連企画 本の美術: ルリユールへの誘い
- 6月 特集展示 ドローイングー水彩・パステル・紙の世界
- 7月 なつやすみの美術館6 きろくとききく
- 9月 特集展示 薔薇色の鏡 銅版画の技と表現
- 11月 動き出す!絵画 ベール北山の夢ーモネ、ゴッホ、ピカソらと大正の若き洋画家

### ■2017年

- 1月 泉茂 ハンサムな絵のつくりかた
- 1月 特集 群像ー交錯する声
- 4月 現代版画の展開
- 5月 特集 おはなしのなかへ
- 6月 鈴木久雄 彫刻の速度 和歌山展
- 7月 なつやすみの美術館7 すききらい、すき?きらい?
- 9月 特集 NANGA 俗を去り自ら楽しむ
- 10月 アメリカへ渡った二人 国吉康雄と石垣栄太郎

### ■2018年

- 1月 特集 はじまりの景色
- 1月 特集 滋賀県立近代美術館所蔵 院展の画家たちI 古きに学ぶ 下村観山を中心に
- 2月 明治150年記念 水彩画家・大下藤次郎展
- 4月 産業と美術のあいだで 印刷術が拓いた楽園
- 4月 特集 滋賀県立近代美術館所蔵 院展の画家たちII 紅児会・赤曜会に集える俊英
- 4月 特集 庭園の眺め 高橋力雄の木版画
- 7月 なつやすみの美術館8 タイムトラベル
- 8月 特集 滋賀県立近代美術館所蔵 院展の画家たちIII 禅僧の如き風姿 富田深仙の画境
- 8月 特集 鈴木昭男 音と場の探究
- 9月 和歌山ー日本
- 和歌山を見つめ、日本の美術、そして近代美術館を見つめる
- 10月 特集 国展の版画
- 11月 創立100周年記念 国画創作協会 全貌展

### ■2019年

- 1月 コレクション名品選
- 4月 LOVE (your) LIFE! まいにちがアート
- 6月 ニューヨーク・アートシーン ロスコ、ウォーホルから草間彌生、バスキアまでー滋賀県立近代美術館コレクションを中心に
- 7月 なつやすみの美術館9: 水と美術 feat. 坂井淑恵
- 7月 特集 みやこの洗練 明治の京都画壇
- 7月 特集 せんばん 前川千帆の版画
- 9月 時代の転換と美術「大正」とその前後
- 10月 芸術に親しもうおでかけ美術館 坂井淑恵展「水の中」\*太地町立石垣記念館にて展示
- 11月 2020 日・チェコ交流100周年 ミュシャと日本、日本とオトリク
- 11月 特集 ニホンラシサを探せ
- 11月 外交史料展 外交史料と近代日本のあゆみ

### ■2020年

- 1月 コレクション名品選
- 5月 もようつくし
- 5月 特集 浜地清松
- 6月 特集 浜口陽三／特別出品 アルフォンス・ミュシャ
- 7月 なつやすみの美術館10 あまたの先日ひしめいて今日
- 9月 芸術に親しもうおでかけ美術館 田中秀介展「かなたの先日ふみこみで今日」\*ぎやらりーなかがわ(御坊市)にて展示
- 9月 もうひとつの日本美術史ー近現代版画の名作2020
- 9月 和歌山県立近代美術館 コレクションの50年
- 12月 美術館を展示する 和歌山県立近代美術館のサステイナビリティ



## 2. 和歌山県立近代美術館という箱

The Museum of Modern Art, Wakayama; A Vessel

美術館というミュージアムとしての「箱」があれば、たくさんの人がともに美術を楽しむことができるのはもちろん、人類共通の財産である作品や資料を、次の世代に伝えることができます。そのためにミュージアムは、機能的に信頼できる箱であることが第一に求められます。

和歌山県では、旧近代美術館での20年近くに及ぶ活動の蓄積を経て、新館建設の声が有識者や市民からあがり、多くの検討と協議を重ねて、より広く、安全な保存と展示の環境を備えた新館を建設することになりました。

選ばれた場所は和歌山大学教育学部の跡地で、和歌山城の南側に位置しています。設計を依頼された世界的な建築家である黒川紀章は、その周辺環境との関係性を考慮し、和歌山城という歴史的存在と対をなすイメージを土台にして、「共生」という基本コンセプトを描きました。建物北側には大きな屋根が突き出していますが、これは刀をイメージしたものです。東側の特徴である三段庇は、天守閣の屋根とネガポジの関係で組み合わせるようにデザインされています。そして美術館・博物館の建物だけでなく、屋外エリアの奥山、そして三年坂通り周辺までを設計し、26年を経た今も、当館は地域のランドマークとなっています。

もちろん意匠のみを追求するのではなく、ミュージアムとしての機能を十分に果たせるように、設備環境についてはすでに黒川が手掛けていたいくつかの博物館施設の建築を踏まえて、現在の和歌山県立近代美術館・博物館は実現されました。



## 設計案

新館建築にあたっては、数々の設計案が練られました。ここでは採用されなかった設計案の模型をご紹介します。建物が曲型であったり、入口が正面を向いていたり、現在の建物の設計に至るまでにさまざまな計画があったことがわかります。これらの案のなかからE案が採用され、さらにブラッシュアップされて現在の建物は設計されました（ブラッシュアップに使用されたため、E案の模型は当館にはありません）。最終的に階段が正面に配置され、上ったところで振り返って美術館に入る導線となりました。階段は参道がイメージされており、だんだんと非日常空間である美術館へと意識を高めていくような効果が期待されています。

ここではあわせて、建物を支えるトラス構造の模型や、正面階段の脇に設置された排気口の機能も兼ね備えた灯籠の模型も展示しています。



当館には5案の模型が残されている 撮影＝長岡浩司

## 黒川紀章のことばから

### アブストラクト・シンボリズム

近代建築の国際様式（インターナショナルスタイル）とは、地域性や文化の違いを超えるグローバルスタンダードによる建築である。私は、グローバルスタンダードとローカルスタンダードの共生する建築を目指していた。

近代建築の遺産である「抽象性」「幾何学」を共通言語として使いながら、その配置の仕方、材料の選択によって、地域性や文化の違いが表現できると考えている。

### 共生

中学時代、東海学園にて、学園長、椎尾弁匡より学んだ「ともいき仏教」と生物学の「共棲」（キョウセイ）を合せて新しい概念として、私がつくったものである。

調和・共存・融合・妥協とは異なり、「本質的な矛盾、対立があり、しかし、相方が相方を必要としている関係」として定義した。

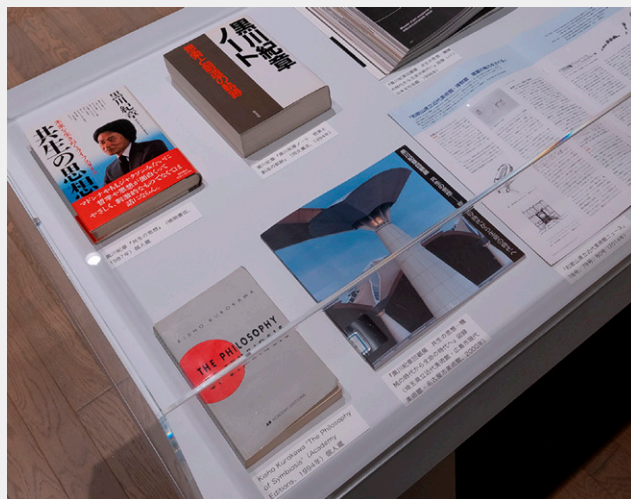
自然と人間、芸術と科学、先端技術と伝統、理性と感性、精神と肉体、東洋と西洋といった西欧の二元論に挑戦する21世紀の新しい思想、新しい世界秩序と考えている。

建築は、時代精神の表現者であり、21世紀の建築は、共生の建築となる。

### 和歌山県立近代美術館・博物館

敷地は和歌山城に隣接する台地の上にある。伝統と現代の景観上の共生を計るため、伝統的な屋根庇の重なりを抽象化して使っている。また、石段、燈籠、せせらぎ、能舞台、といった外構造園にも伝統的な造型言語が使われている。外壁のタイルのディテールや色彩にも日本の伝統が抽象的に表現されている。伝統的形態の抽象化によるアブストラクト・シンボリズムの作品である。

出典：『黒川紀章回顧展 共生の思想—機械の時代から生命の時代へ』（2000年、黒川紀章回顧展実行委員会）



## 黒川紀章 1934-2007

1934年名古屋市生まれ。京都大学建築学科（1957年）を経て東京大学大学院博士課程所定単位修得（1964年）。1960年弱冠26才で建築の理論運動メタボリズムを結成、衝撃的に世界にデビューしました。「中銀カプセルタワー」（1972年、東京）はその代表作です。

その後、機械の時代から生命の時代への変革を一貫して主張してきました。共生、新陳代謝（メタボリズム）、情報、循環（リサイクル）、中間領域、フラクタル（非線形）、生態系（エコロジー）等、45年間提言してきたコンセプトは、いずれも「生命の原理」という点で共通しています。その活動は世界20か国におよび、世界各地で完成した作品は高い評価を得ています。

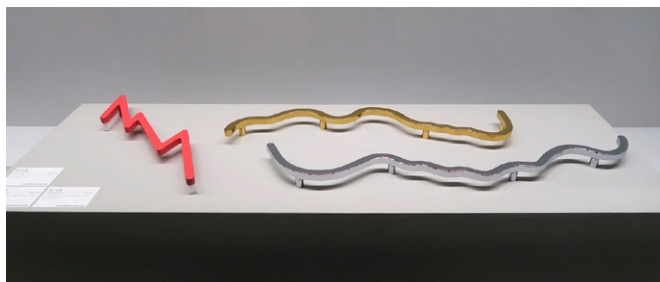
美術館や博物館建築でも、国立民族学博物館（1977年）、埼玉県立近代美術館（1982年）、名古屋市美術館（1988年）、広島市現代美術館（1989年）、入江泰吉記念奈良市写真美術館（1992年）、ヴァン・ゴッホ美術館新館（1990-1998年）、福井県立恐竜博物館（2000年）、長崎歴史文化博物館（2005年）、国立新美術館（2006年）など、数多くの作品を手がけました。



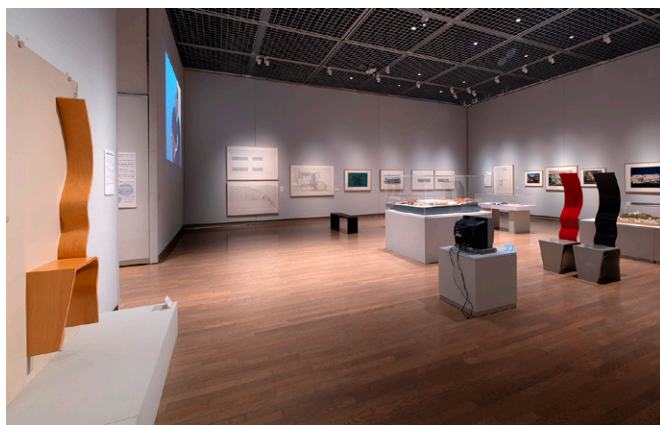
## フラクタルなかたち

黒川紀章の思想には、「歴史との共生」とともに「フラクタル」があります。フラクタルは、フランスの数学者マンデルブローが導入した幾何学で、図形の部分と全体が自己相似形になっていることを指す概念です。これによって海岸線や雲、山、樹木の枝分かれなどに見られる複雑な図形が数学的に理論化されました。

自然界には遠くから見ても近づいて見ても同じかたちが見いだされるというフラクタルなかたちを、黒川は建築にも採用しました。当館の階段の手すりや、なぜ曲線なのか不思議に思われた方もいらっしゃると思いますが、実はその曲線は和歌山県内を流れる紀の川や有田川、古座川などのかたちがトレースされているのです。ドアのハンドルやノブ、美術館内に置かれた椅子、展示室受付カウンターの天板などにもフラクタルなかたちが採用されました。背もたれが赤と黒の椅子は日頃館内で使用しているもので、展示室内でも実際に座れる椅子として配置しました。



当館設計時に生み出された数多くのデザインは、その後、さまざまな建築でも採用されている



左端に見えるのは椅子のモックアップで、右に並ぶ赤・黒の背もたれの椅子は、実際に館内で使用しているもの 撮影＝長岡浩司



和歌山城を含めて作られた模型



最終の模型

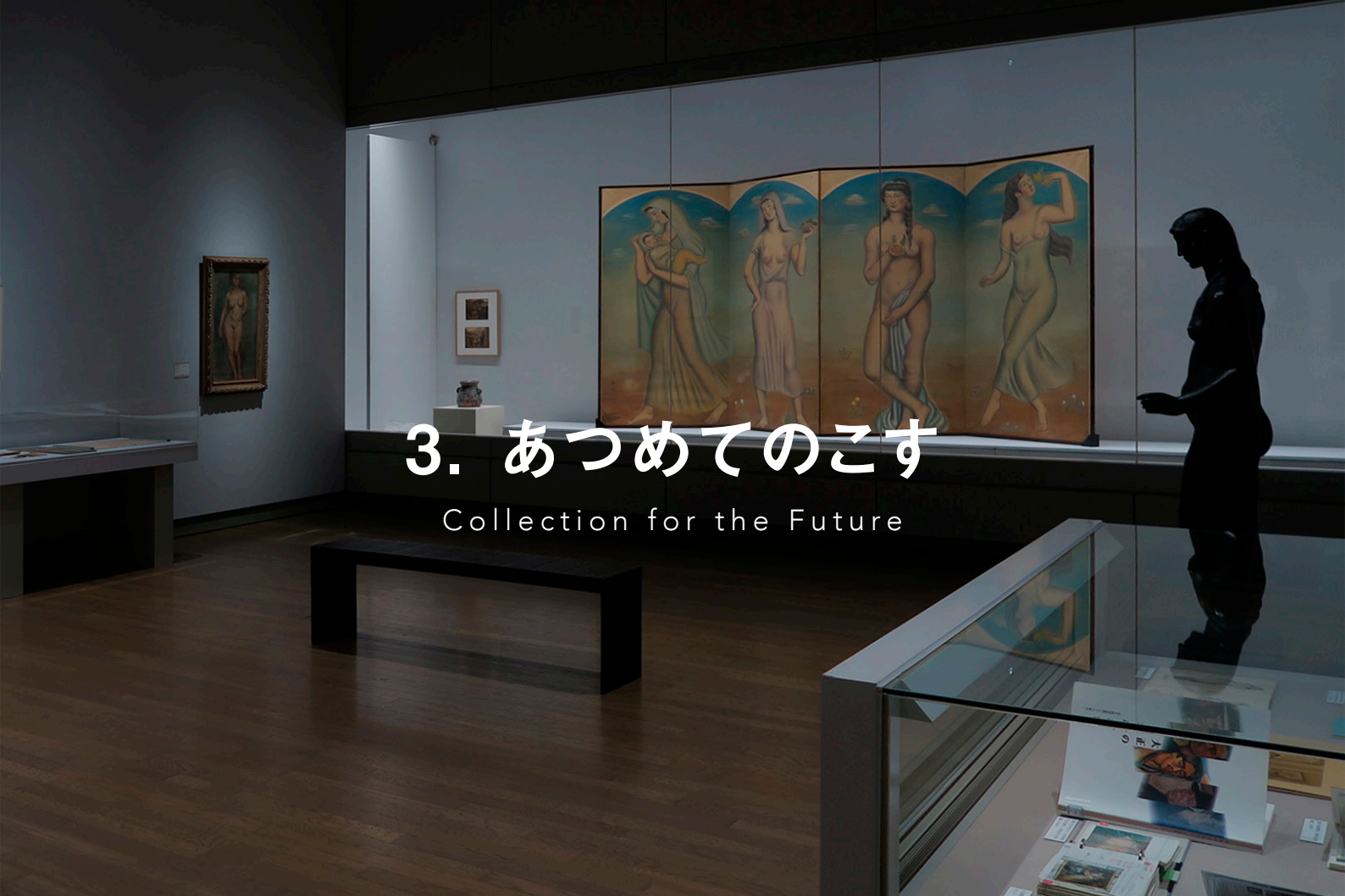


建築記録写真



それぞれが完成当時の熱を伝える





### 3. あつめてのこす

Collection for the Future

美術館の大切な仕事として、調査研究と収集活動があります。ではなぜ美術館は収集を行うのでしょうか。また調査研究とは一体何をしているのでしょうか。

美術作品はそれ自体、人類が行った優れた創作活動の成果であり、また、地域に関わる文化や歴史を物語ります。これらについて、またこれらを手がかりに学ぶことで、私たちは過去から現在まで続く幅広い時間の広がりの中で物事を考えることができます。そして美術作品を後世に伝えることは、未来の人々の学びへもつながります。こうした目的のもと、美術館はそれぞれの地域的、文化的特質に基づいて収集を行います。

そして何を集めるかを決め、その必要性を考えるために行うのが調査研究です。集めた作品や資料を観察し、データを取り、関連するさまざまな手がかりを頼りに、作家や作品の情報、活動歴などをまとめること、言い換えると、一次資料を整理し、情報として扱えるかたちにするのもまた、調査研究に含まれます。名前をつけ、記録をとり、整理することで、ものは残すべき対象として扱うことができるようになります。

こうした美術館での調査研究の成果は、展覧会というかたちで示され、新たな学びや発見を生み出すきっかけともなります。展覧会に際して刊行する図録はその成果を公にし、作品や資料の価値を広く、時代を超えて伝える大切な記録です。

さらに調査研究は、先達の仕事を引き継ぎ、継続することでより厚みを増していきます。当館では、和歌山県立美術館時代から収集した和歌山ゆかりの作家の作品に加えて、細かな調査資料が、現在にいたるまで引き継がれてきました。その収集と調査研究の積み重ねは、地域ならではの傾向を見いだすことにもつながります。例えば和歌山には版画を主な表現の手段とした作家や、移民として海を渡った画家たちが多いことなどです。浮かび上がった特徴は、和歌山という地域の文化や歴史を物語る個性であり、それらの項目をまとめた収集方針に基づいて、当館は体系的なコレクションを築き続けています。



## 「明治100年記念 郷土作家回顧展」関連資料

1963年に和歌山県立美術館が開館すると、川口軌外や日高昌克など、県ゆかりの作家を個展形式で取り上げる展覧会が継続して開催されます。そのなか、1968年に開催された「明治100年記念 郷土作家回顧展」は、明治時代から開催当時までに活動した、和歌山県ゆかりの物故美術家について、網羅的に紹介することを目的としたものでした。その開催に向けて、事前に行われた大規模な調査は、近代美術館の基礎を作る仕事ともなります。

調査は、洋画、日本画、彫刻など、各分野にどのような作家がいたのかを洗い出すことからはじまりました。作家が分かれば、次に遺族や関係者の連絡先を調べて問い合わせの手紙を送り、そこに同封した調書に経歴や作品の所在などを記載して返送してもらうというものでした。そしてさらには、返送された情報をたどって作品を探し、出品交渉の上で借用、展覧会で紹介しています。

この時の調査で残された調書のなかには、現在ではたどることが難しい情報も多く、それぞれの作家について調べるための重要な手がかりを与えてくれます。個人情報も多く調書は一般に公開できませんが、その調査を元に、『郷土の美術家 明治・大正・昭和の物故作家』（和歌山県立美術館、1968年）が編集、刊行されており、各作家に関する情報はそこで確認することができます。

以降、この章では、和歌山県にゆかりのある4人の作家の作品と資料を通して、当館における収集と調査研究の実際と成果をご紹介します。

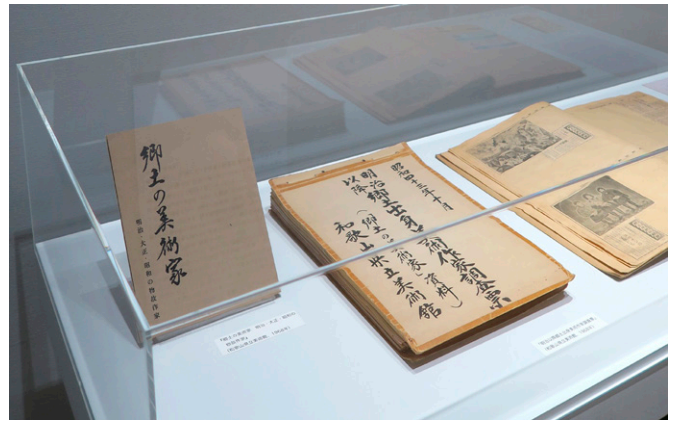
### 保田龍門 1891-1965

保田龍門は1891年、和歌山県那賀郡龍門村（現、紀の川市）に生まれた画家であり、彫刻家です。本名を重右衛門といい、5人兄弟の末子、生家は農業を営んでいました。医学の道へ進むも、美術への思いが断ちがたく、20歳を過ぎてから東京美術学校に入学。卒業した1917年、第11回文展に出品した絵画《母と子》（和歌山刑務所蔵）が特選となり、美術家としての道が開けます。作品のモデルとなり、進む道を変わず後押ししてくれた母の深い愛情は、生涯を通じて制作テーマであり続けました。

フランス留学を果たし、帰国後は郷里に西村伊作の設計によるアトリエを建築、日本美術院彫刻部の主要な作家として活動します。戦後、1953年には和歌山大学文学部芸学部の教授となって指導にあたり、1965年に亡くなります。

展示中の彫刻《少女》が、先述の「明治100年記念 郷土作家回顧展」で紹介された翌1969年4月には、回顧展となる「郷土出身大家展 保田龍門」が開催されます。没後4年での開催は、当時から県を代表する美術家として考えられていた状況を物語ります。展覧会後に《少女》は、県立美術館に収蔵された最初の保田龍門作品となりました。

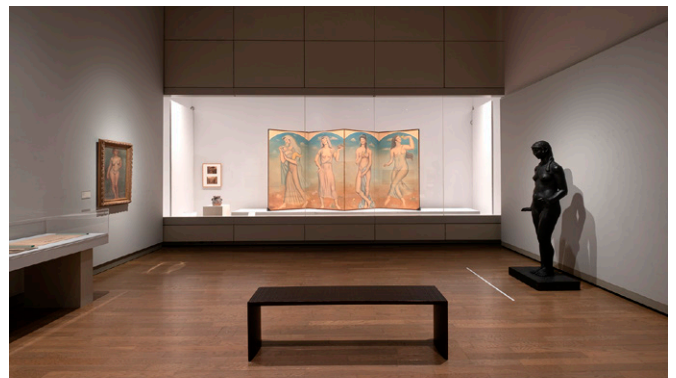
1994年に新しい近代美術館が開館すると、開館記念展の2本目として、「大正のまなざし—若き保田龍門とその時代—」展を開催することになります。展覧会に向けて改めて大規模な調査が行われ、作品の収集にも力が注がれました。子息の彫刻家、保田春彦氏やご親族からは数多くの作品とともに、写真や蔵書などの関連資料も多数ご寄贈いただきました。龍門が筆入れに使っていたという西村伊作の陶芸作品もそのひとつです。所蔵家からも作品寄贈の申し出をいただき、展示中の《四季（春夏秋冬）》は近年に収蔵した重要な作品です。作品と資料のつながりは、作者や作品のより深い理解へと導きます。



「明治以降郷土出身美術作家調査票」(右)とそれを元にまとめられた『郷土の美術家 明治・大正・昭和の物故作家』(左：和歌山県立美術館、1968年)



第11回文展特選賞状(右)と《母と子》を撮影した写真(隣)



画面右に見えるのが県立美術館時代に収蔵された、最初の保田龍門作品《少女》／ガラスケースの中の屏風は、最も新しく収蔵された龍門作品《四季（春夏秋冬）》／西村伊作の陶芸作品（同左）は龍門が筆入れに使っていたもの 撮影＝長岡浩司



作品が制作された時代の資料はもちろんのこと、後代の調査資料もまた、美術館で蓄積すべき資料となっていく



## 野長瀬晩花 1889-1964

野長瀬晩花は1889年、和歌山県西牟婁郡近野村（現、田辺市近露）に生まれました。本名は弘男です。大阪や京都の画塾で絵を学び、1909年には京都市立絵画専門学校に入学しました。学校は2年で中退しますが、同世代の美術家や竹久夢とも交流を深め、明治末から大正時代の京都で、既存の画壇とは距離を置いた、モダンで奇抜な作品を手がけて注目されます。1918年には、学校の同窓生であった小野竹喬、榊原紫峰、土田麦僊、村上華岳と、新しい日本画の創設を掲げて国画創作協会を創設します。

当館が1970年に開館したのち、郷土作家に関する最初の企画展でとりあげたのがこの晩花でした。1971年3月に開催した「大夢・晩花」展は、彫刻家の建畠大夢との二人展という形で、和歌山が誇る画家としてその作品を紹介しました。画家本人は1964年に亡くなっており、展覧会に際しては妻の婉子氏の全面的な協力をいただくとともに、生前に交流のあった関係者の元など、大規模で細かな調査が行われています。

婉子氏からは、スケッチブックやアルバムなど手元にあった資料の多くをご寄贈いただき、それらは作家や作品を研究するための重要な手がかりとなっています。またこの時には、晩花の画業をたどる上で欠かせない重要な作品が、関係者から購入や寄贈という形で收藏されています。

主に調査に当たったのは、大学教員を務めつつ1967年より嘱託職員として専門家の立場から美術館の活動を支えた和高伸二と、当館初代学芸員の酒井哲朗です。和高がこの時の調査を元にまとめた『野長瀬晩花』（近野振興会、1975年）は、今も晩花の研究に欠かせない重要な資料です。

近年では、国画創作協会の活動を紹介する「国画創作協会の全貌展」（2018年）を開催し、また1921年にともに渡欧した黒田重太郎の作品を收藏するなど、調査研究や関連作家を含めた作品の収集を継続しています。とはいえ、50年前に行われた貴重な仕事の成果を十分に生かすことが、先輩からの宿題として現在の職員に与えられています。

## 石垣栄太郎 1893-1958

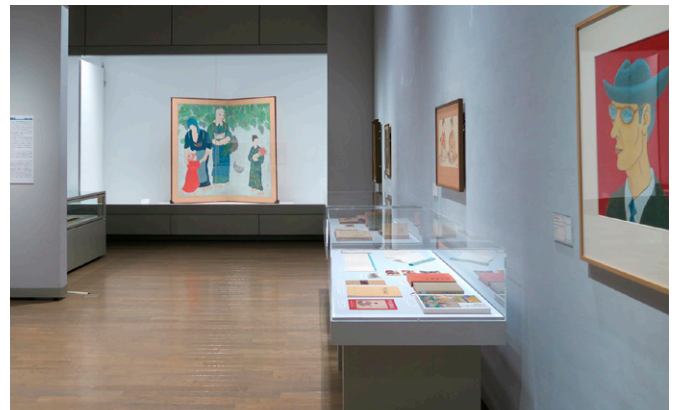
石垣栄太郎は、1893年に和歌山県東牟婁郡太地村（現、太地町）に生まれました。移民としてアメリカに渡っていた父に呼ばれて渡米、同地で画家となります。民衆の立場から社会的な問題を主題とした作品を描き、メキシコの壁画運動にも影響を受け、アメリカで認められました。戦中もアメリカにとどまり、1951年に帰国。1958年に亡くなります。

当館では移民を多く輩出した和歌山県の歴史を踏まえ、浜地清松やヘンリー・杉本ら、戦前の渡米画家たちの仕事を、展覧会や調査研究、作品収集の重要なテーマとしています。そのきっかけとなっているのが、妻である石垣綾子氏から、まとめて寄贈を受けた石垣栄太郎の作品です。

石垣の作品では、1階展示室（「コレクションの50年」展）で展示していた《街》が、1965年度に收藏した最初の作品です。その後、1967年度に油彩画を中心とする19点、1982年度に200点近くのデッサンなどを綾子氏よりご寄贈いただいています。合わせて展覧会での紹介も継続し、1966年の「石垣栄太郎遺作展」をはじめ、1972年には「アメリカにおける日本人作家回顧展」として、石垣、杉本、国吉康雄の3人による展覧会を開催しました。このテーマはさらに広がり、1987年の「太平洋を越えた日本の画家たち ア



アルバムや書簡は、作家の交友関係を生き生きと映し出す  
撮影＝長岡浩司



正面に見える《[秋の頃]》（1917年頃）は、国画創作協会結成直前の貴重な作例のひとつ



1966年の「石垣栄太郎遺作展」を機に妻 綾子から寄贈されたスクラップブックは、アメリカ時代の貴重な一次資料

メロに学んだ18人」、新館開館後は1997年に「アメリカの中の日本 石垣栄太郎と戦前の渡米画家たち」、そして2013年の「生誕120年記念 石垣栄太郎展」、2015年の特集展示「アメリカ移民の歴史と芸術家たち」や2017年の「アメリカへ渡った二人 国吉康雄と石垣栄太郎」展へとつながります。

この間、綾子氏が設立し太地町へ寄贈された石垣の顕彰施設である、太地町立石垣記念館との共同研究を進めるほか、破壊されて現存しない重要な壁画に関わる油彩作品をアメリカから里帰りさせて収蔵するなど、調査研究、収集の積み重ねを行っています。石垣記念館との共同研究は現在も継続しており、その成果を改めて紹介するべく作業を進めています。



石垣は、戦前から戦後にわたってアメリカに生きた日本人として、さまざまな社会問題を描き出した

## 村井正誠 1905-1999

ここでは村井正誠の作品2点を通して、作品保存に関わる仕事をトピックとして紹介します。

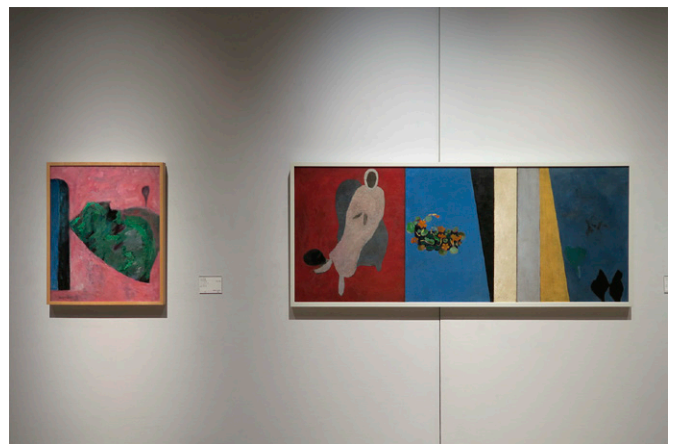
村井正誠は、岐阜県大垣市に生まれ、本県東牟婁郡新宮町（現、新宮市）で育ちます。同地には文化学院を創設する西村伊作がおり、その創作活動を見て美術に関心を抱きました。上京して西村の文化学院で美術を学び、渡欧。同地で受けた様々な影響から、抽象表現へと進み、昭和から平成にかけて抽象絵画のバイオニアとして活躍を続けました。

当館では県ゆかりの作家として作品の収集を行い、1979年に開催した「村井正誠展」をきっかけに、戦前の作品から近作まで、19点の油彩画と6点の版画を作者本人よりご寄贈いただいています。ここで紹介している《アラブの窓》もそのひとつです。

収蔵した作品は、その状態を見ながら、必要に応じて専門家に修復を依頼することがあります。《アラブの窓》は、2005年に修復作業を行いました。この作品は、3つのキャンバスに描かれた絵をつなげた構造をしています。いずれの画面も元々あった自分の古い絵（古キャンバス）の上に絵具を重ねて描かれており、絵具層が厚く、亀裂や皺などが発生しやすいため、状態の改善が必要でした。

その修復作業に際して、中央の画面の下から発見されたのが、《ロンバルディア》です。画面を重ねて木枠に留められていました。作者が1955年に同作について文章で触れた際には、自身も写真を見て確認していると言っていますので、長い間その状態にあり、そのまま当館に寄贈されたと考えられます。《ロンバルディア》も村井にとって重要な作品であったために貴重な発見となり、こちらも合わせて修復を行いました。

作品のとなりに展示しているのは、その修復記録と当館学芸員による研究論文、そして作品のカードです。美術館で収蔵する作品には、作品名や寸法などの情報を記載し、写真が印刷または貼り付けられた作品カードが作られています。各館によって形式はさまざまですが、当館では個別フォルダーを作り、作品に関する文献や作品の展示記録など、作品にかかわる情報を、電子媒体に加えて紙媒体でも管理し、残しています。



《アラブの窓》（右）と修復に際して発見された《ロンバルディア》（左）



作品カードや修復記録、論文などを展示した



## 学芸員の調査道具（ごく一部）

ここに並ぶのは、学芸員が作品の調査に赴く時に持参する道具類の一部です。それぞれが手にあった使いやすい道具を選び、現場や作品に応じて持参するものを選びます。代表的なものを簡単に紹介しましょう。

### メジャー

大きさを計測します。作品に応じて樹脂製のいわゆる布メジャー、金属製の巻き尺などを使い分けます。作品の近くで使いますので、計測時は注意が必要です。

### 小型のライト

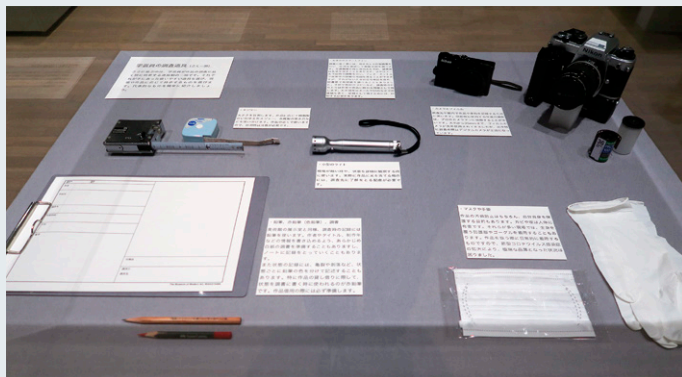
現場が暗い時や、状態を詳細に観察する時に使います。実際に作品に光を当てる場合には、調査先に了解をとる配慮が必要です。

### カメラとフィルム

調査先や館内で作品や資料を記録するために使います。印刷物に使用する写真の撮影は、プロのカメラマンに依頼することが多いです。大判から35mmまで、フィルムカメラが長年使用されてきましたが、近年特に調査の際はデジタルカメラが主流になっています。

### 鉛筆、赤鉛筆（色鉛筆）、調書

美術館の展示室と同様、調査時の記録には鉛筆を使います。作者やタイトル、制作年などの情報を書き込むよう、あらかじめ白紙の調書を準備することもありますし、ノートに記録をとっていくこともあります。また状態の記録には、亀裂や剥落など、状態ごとに鉛筆の色を分けて記述することもあります。特に作品の貸し借りに際して、状態を調書に書く時に使われるのが赤鉛筆です。作品借用の際には必ず準備します。



### マスクや手袋

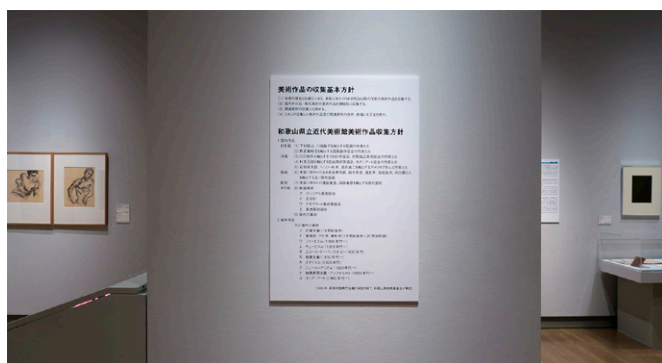
作品の汚損防止はもちろん、自分自身を保護する目的もあります。カビや埃は人体に有害です。それらが多い現場では、全身を覆う防護服やゴーグルを着用することもあります。作品を扱う際に日常的に着用するものですので、新型コロナウイルス感染症の拡大により、極端な品薄となった状況は困りました。

### お手元のスマートフォン

調査に赴く際には、相手先との日程調整を行い、住所を確認して移動手段を調べます。交通機関や時に宿泊先を予約、調査後は礼状を出すこともあります。近年はメールで日時の調整を行い、インターネット上で世界中の詳細な地図を見ることができですが、それが無いときは住宅地図を含め、図書館で地図帳を調べることもありました。手紙や地図のコピーなど、調査時のやりとりは作家や作品に関わる情報として残します。ただ近年はメールやSNSなどでの連絡も多く、館の記録として残すためには、印刷する必要があります。

## 美術作品の収集基本方針

- (1) 本県の歴史と伝統をふまえ、本県にゆかりのある明治以降の作家の美術作品を収集する。
- (2) 国内外の近・現代美術の美術作品を積極的に収集する。
- (3) 関連資料の収集にも努める。
- (4) これらの収集した美術作品及び関連資料の保存、修復にも努める。



## 和歌山県立近代美術館美術作品収集方針

### 1 国内作品

#### 日本画

- (1) 下村観山、川端龍子を軸とする院展の作家たち
- (2) 野長瀬晩花を軸とする国画創作協会の作家たち

#### 洋画

- (3) 川口軌外を軸とする1930年協会、初期独立美術協会の作家たち
- (4) 村井正誠を軸とする自由美術家協会、モダンアート協会の作家たち
- (5) 石垣栄太郎、ヘンリー杉本、高井貞二を軸とするアメリカで学んだ作家たち

#### 版画

- (6) 本県にゆかりのある恩地孝四郎、田中恭吉、逸見享、吉田政次、浜口陽三らを軸とする近・現代版画

#### 彫刻

- (7) 本県にゆかりの建島寛造、保田春彦を軸とする現代彫刻

#### その他

- (8) 戦後美術
  - ア バンリアル美術協会
  - イ 走泥社
  - ウ デモクラート美術家協会
  - エ 具体美術協会
- (9) 現代の美術

### 2 海外作品

#### (10) 海外の美術

- ア 印象主義（19世紀後半）
- イ 印象派、ナビ派、素朴派（19世紀後半～20世紀初頭）
- ウ フォービズム（1900年代～）
- エ キュービズム（1910年代～）
- オ エコール・ド・パリ（1910～1930年代）
- カ 抽象主義（1910年代～）
- キ ダダイズム（1920年代）
- ク シュールレアリスム（1920年代～）
- ケ 抽象表現主義・アンフォルメル（1950年代～）
- コ ポップ・アート（1960年代～）



## 4. 託されるコレクション

### Collection Entrusted

作品収集の手段には購入という方法もありますが、当館では作品をいただく「寄贈」という方法で収蔵された作品点数の方が多くなっています。美術作家本人やその親族、コレクターなどからお申し出をいただくこともあれば、展覧会の調査を通じて見つかった作品をお譲りいただけるよう、美術館側からお願いをすることもあります。「ください」とお願いするのは図々しく見えるかもしれませんが、その作品や資料の価値を社会全体の財産として先々まで残していく意味をご理解いただき、これまでおよそ8000点の作品をご寄贈いただいています。

当館では田中恭吉や石垣栄太郎ら、地元作家の貴重な作品や資料をまとめてご寄贈いただいているほか、佐伯祐三のコレクションなど、日本の美術史を考える上で重要な作品の寄贈も数多く受けています。また現代美術コレクターから1000点を超える作品の一括寄贈を受けるなど、メディアからの注目を集めた事例もあります。さらには当館の版画コレクションの充実を目的として結成されたグループが作家と美術館の橋渡し役となって、作品をご寄贈いただいたこともありました。

けれども残念ながら、すべてのお申し出を受けることはできません。これまでの活動を通じて築き上げてきた収集方針に則った活動を続けていくことが、美術館の責任として求められるからです。そのため作品の受け入れにあたっては、学芸員による事前の調査に加え、「美術作品選定委員会」と呼ばれる外部有識者会議での了承を得る必要があるなど、いくつもの手続きが行われます。それは作品購入の場合も同じです。

このパネルの冒頭に寄贈とは「いただく／もらう」ことだと記しました。手続きによって所有者は確かに美術館に移りますが、将来の世代に責任を持って作品を引き継ぐという意味では、美術館のコレクションは社会全体の財産をお預かりしたものです。寄贈とは日々の活動への信頼に基づいて、美術館へ託された未来への願いなのだと受けとめています。

ここでは、さまざまなかたちでご寄贈いただいた作品を、そのごく一部に過ぎませんが、ご寄贈者とともにご紹介いたします。



## 作者本人から

### 川口軌外《港》1957（昭和32）

油彩、キャンバス 作者寄贈（1964年度）

1963年3月に開館した和歌山県立美術館では、7月に「第1回郷土出身大家作品展」として「川口軌外展」が開催されました。翌年度、本作は作者本人より寄贈されており、キャンバスの裏に「展覧会記念／寄贈／川口軌外」という書き込みがあります。同じ時に美術館が購入した作品が、現在1階展示室で展示中の《少女と貝殻》です。以降、川口は当館のコレクションを形成する中心作家のひとりとして、関係者からの寄贈や購入による作品収集を継続しています。

### 高井貞二《故郷の風景》1956（昭和31）

油彩、キャンバス 作者寄贈（1979年度）

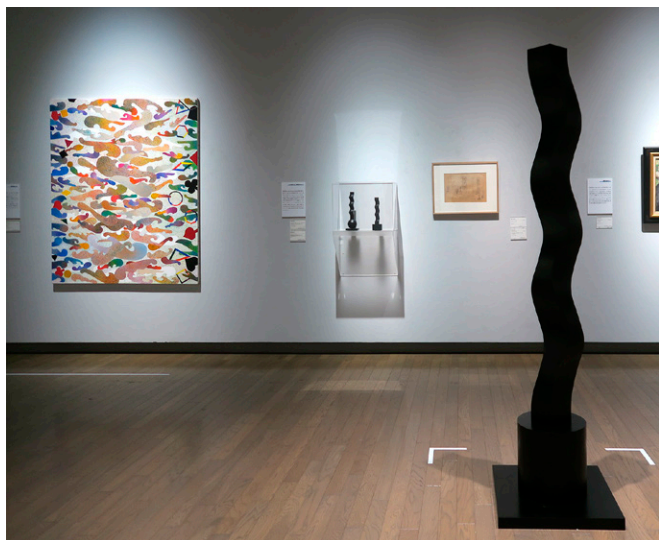
高井貞二は高野口町で育ち、旧制伊都中学校在学中に絵を描きはじめます。卒業後大阪で働きながら絵を学び、19歳で上京すると、その年の二科展で早くも入選を果たしました。戦前は東京で活動し、戦後1954年にはニューヨークへ移住、長らく同地で活躍しました。当館では作者本人より1978年度と翌年度に、初期から滞米中の近作まで画業を通覧する130点余りの作品寄贈を受け、1979年10月の「高井貞二展」で紹介しました。その後、関係者からも新たな作品をご寄贈いただいています。

## 関係者から

### 泉 茂《焦燥》1993（平成5）

アクリル絵具、キャンバス 泉照子氏寄贈（2016年度）

寄贈者の泉照子氏（1925-）は、日本における服飾デザイナーの先駆者のひとりです。1951年、26歳の誕生日に画家の泉茂と結婚、ともに赴いたニューヨークやパリで、その仕事に就きます。帰国後は大阪で活躍されました。氏は1995年に夫が亡くなったのち、残された作品をいくつかの美術館へ寄贈されています。「関西の美術家シリーズ」の第1回展で紹介して以降、つながりが生まれた当館には、ほぼ全ての版画作品と、各時代の主要な油彩やドローイング作品、1000点余りをご寄贈くださいました。



美術館を展示する 和歌山県立近代美術館のサステイナビリティ



会場風景（左から）

川口軌外《港》1957（昭和32）

高井貞二《故郷の風景》1956（昭和31）

村井正誠《母と子》1952（昭和27）

### 村井正誠《母と子》1952（昭和27）

油彩、キャンバス 作者寄贈（1979年度）

村井正誠は岐阜県大垣市に生まれ、本県新宮市で育ちます。同地で文化学院を設立する西村伊作の創作活動を見て美術に関心を抱き、上京して同学院で美術を学びました。当館では県ゆかりの作家として作品の収集を行い、1979年に開催した「村井正誠展」をきっかけに、戦前の作品から近作まで、19点の油彩画と6点の版画を作者本人よりご寄贈いただいています。その後も継続して作品の紹介を行い、関係者からも新たな作品をご寄贈いただきました。

## 作者本人・関係者から

### 建畠覚造《WAVING FIGURE 36A（小）》1986（昭和61）頃

木、ウレタン塗料 建畠嘉氏寄贈（2007年度）

### 建畠覚造《WAVING FIGURE 37B（小）》1986（昭和61）頃

木、ウレタン塗料 建畠嘉氏寄贈（2007年度）

### 建畠覚造《WAVING FIGURE 32（大）》1986（昭和61）

木、ウレタン塗料 作者寄贈（1999年度）

### 建畠覚造《ドローイング》1991（平成3）頃

鉛筆、紙 建畠嘉氏寄贈（2013年度）

建畠覚造は、有田川町出身の彫刻家、建畠大夢の子息であり、日本における抽象彫刻の第一人者として戦後長らく活躍しました。生前より作者本人から継続して作品をご寄贈いただき、2006年に逝去された後は妻の嘉氏より遺作の寄贈申し出を受けました。つながりのあった美術館が共同でアトリエの調査を行い、特に残された大量のドローイングは当館の職員が歴代仕事を引き継いで整理に当たりました。当館に寄贈された1940年代から没する直前までの2700点あまりのドローイングは、建畠の造形思考の源泉や制作過程を伝えるものです。

会場風景（左から）

泉 茂《焦燥》1993（平成5）

建畠覚造《WAVING FIGURE 36A（小）》1986（昭和61）頃

建畠覚造《WAVING FIGURE 37B（小）》1986（昭和61）頃

建畠覚造《ドローイング》1991（平成3）頃

建畠覚造《WAVING FIGURE 32（大）》1986（昭和61）

## 関係者から

### 田中恭吉《バラの刺》1914 (大正3)

油彩、キャンバス 恩地邦郎氏寄贈 (1987年度)

### 恩地孝四郎《海の女》1912 (明治45/大正元)

油彩、キャンバス 恩地邦郎氏寄贈 (1987年度)

### 藤森静雄《花》1915 (大正4)

油彩、キャンバス 恩地邦郎氏寄贈 (1987年度)

恩地邦郎氏 (1920-2001) は、恩地孝四郎の子息です。教員を務めるとともに創作活動を行い、また父の作品研究も行いました。1987年度には、父が若き日に創作活動とともにした田中恭吉に関わる作品と資料を、まとめてご寄贈くださっています。それらは、1915年に田中が23歳で没したのち、親友であった恩地孝四郎が引き継ぎ大切に守り続けたものです。親友の子を通じて1000点を超える作品と資料は郷里に帰り、田中の短くも濃密な創作活動を今に伝えます。

会場風景 (左から)

浜地清松《暖炉》1911 (明治44)

佐伯祐三《オブセルヴァトワール附近》1927 (昭和2)

梅原龍三郎《静浦 (口野) 風景》1929 (昭和4)

ラウル・デュフィ《コンポティエのある静物》1940 (昭和15) 頃

## 地域から

### 浜地清松《暖炉》1911 (明治44)

油彩、キャンバス 古座町立津荷小学校寄贈 (2004年度)

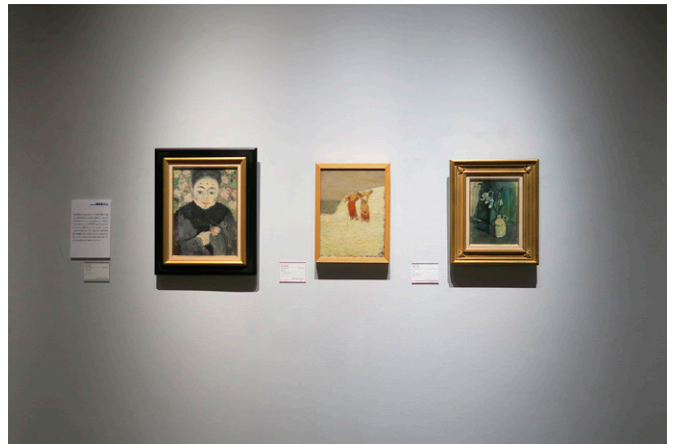
浜地清松は、串本町津荷に生まれ、1901年に渡米し画家となりました。和歌山県は戦前に多くのアメリカ移民を輩出しますが、浜地もそのひとりです。1920年に帰国、さらに再渡米、渡欧後、1928年からは国内で活動が続けました。本作は、郷里の津荷小学校に戦前より飾られてきたと伝わります。浜地のアメリカ時代の油彩画はほとんど残っておらず、貴重な作品です。2005年4月、古座町が串本町と合併し、津荷小学校が閉校となるのを機会に、当館に寄贈していただくこととなりました。地域の歴史は、作品とともに引き継がれています。

## 支援者から

### 佐伯祐三《オブセルヴァトワール附近》1927 (昭和2)

油彩、キャンバス 玉井一郎氏寄贈 (1994年度)

玉井一郎氏 (1926-2003) は歯科医師を務めながら、和歌山県の文化振興に大きな貢献をされました。当館では、県立美術館時代より運営協議会委員として活動をご支援くださり、友の会会長も務められました。和歌山版画ビエンナーレ展の開催にあたっては、実行委員会の委員長として運営を支えられます。ご寄贈くださった多くの作品のなかでも、特に1994年に新館が開館するにあたりご寄贈いただいた14点の佐伯祐三作品は、当館の活動を充実させる重要なコレクションです。



会場風景 (左から)

田中恭吉《バラの刺》1914 (大正3)

恩地孝四郎《海の女》1912 (明治45/大正元)

藤森静雄《花》1915 (大正4)



## 支援者から

### 梅原龍三郎《静浦 (口野) 風景》1929 (昭和4)

油彩、キャンバス 篠田博之氏、めぐみ氏寄贈 (2002年度)

医師の篠田博之氏 (1929-2011) と妻のめぐみ氏 (1938-2009) は和歌山の医療を支えるとともに、文化財保護に関わる仕事にも取り組まれました。多くの人に優れた美術作品を見て欲しいというご意志から、収集された絵画21点を2001年度より数度にわたってご寄贈くださいました。ジョルジュ・ルオーや梅原龍三郎など、当館では収蔵できていなかった作家の油彩画のほか、生前に活動を支援された日本画家、井上永悠の作品が含まれています。

## 支援者から

### ラウル・デュフィ《コンポティエのある静物》1940 (昭和15) 頃

油彩、キャンバス 森林平氏寄贈 (2001年度)

すさみ町出身の森林平氏 (1921-2005) は、森精機製作所 (現DMG森精機) を創業し、工作機械製造のトップメーカーに育てられました。和歌山県師範学校を卒業された縁から、その跡地に設立された当館に、2001年度、収集された絵画10点をご寄贈くださいました。ラウル・デュフィ、キース・ヴァン・ドンゲンなど、当館では収蔵点数の少ない、西欧の作家の油彩画が含まれています。



## 支援者から

山本容子《To the park》1978 (昭和53)

エッチング、紙 ブリッジ寄贈 (2000年度)

安東菜々《Electric Wire 4》1977 (昭和52)

シルクスクリーン、紙 ブリッジ寄贈 (2000年度)

田中孝《Tree》1977 (昭和52)

シルクスクリーン、紙 ブリッジ寄贈 (2000年度)

ブリッジは、当館が収集を継続している版画コレクションの充実を目的として結成された匿名のグループです。特に現代版画に関して、自分たちで作家や作品の研究を行い、美術館のコレクションを勘案した上で作品を収集、寄贈してくださいました。安東菜々、野田哲也、山本容子など、重要な作家の作品53点が2000年度に当館のコレクションに加わることで、現代版画の分野が一層充実することになります。



会場風景 (左から)

佐伯祐三《オブセルヴァトワール附近》1927 (昭和2)

梅原龍三郎《静浦 (口野) 風景》1929 (昭和4)

ラウル・デュフィ《コンボティエのある静物》1940 (昭和15) 頃

名和晃平《PIXCELL - SHEEP》2002 (平成14)

横尾忠則《MAJOR ARCANA》1985 (昭和60)

パラモデル《パラモデリック・グラフィティ (沢田マンションの屋上庭園)》2007 (平成19)

撮影＝長岡浩司



会場風景 (左から)

山本容子《TO THE PARK》1978 (昭和53)

安東菜々《ELECTRIC WIRE 4》1977 (昭和52)

田中孝《TREE》1977 (昭和52)

## 支援者から

横尾忠則《MAJOR ARCANA》1985 (昭和60)

リトグラフ、紙 堀内俊男氏寄贈 (2000年度)

堀内俊男氏 (1935-2014) は、1974年海南市に画廊ビュッフェを開業され、1977年に画廊ビュッフェファイヴと改名、数多くの展覧会を通して、美術館では取り上げきれない多様な美術を紹介されてきました。穏やかな人柄と誠実な仕事から多くの人と信頼関係を築かれ、特に地元の作家に関する情報は、美術館職員が教えを請うことも多く、美術館活動をさまざまに支えてくださいました。堀内氏からは和歌山ゆかりの作家の貴重な作品をご紹介いただくとともに、当館のコレクションを補うように、現代版画を中心とする作品をご寄贈いただいています。

## コレクターから

名和晃平《PixCell - Sheep》2002 (平成14)

ミクストメディア 田中恒子氏寄贈 (2009年度)

パラモデル《パラモデリック・グラフィティ (沢田マンションの屋上庭園)》2007 (平成19)

ラムダプリント 田中恒子氏寄贈 (2009年度)

田中恒子氏 (1941-) は、住居学の研究者として大学で教鞭を執り、同時に現代美術のコレクターとして作品を購入することで多くの作家の活動を支援されてきました。自宅で作品とともにある暮らしを实践されてきましたが、作品の保存と公開を考え、社会に美術の価値を残し、未来にわたって共有するために、美術館への一括寄贈を考えられました。田中氏は、当館のそれまでの活動を評価していただき、コレクションの寄贈先として当館を選んでくださいました。2009年度を中心にご寄贈くださった1000点を超える作品は、多様な価値観にあふれ、当館の活動に新たな展開をもたらしています。



## 5. 見せてのこす 展覧会とサステナビリティ

Pros and Cons? クレート↓ 作品→  
Exhibition and Sustainability

展覧会を開催することは、作品保存の面からはマイナスの側面があります。水彩画や版画、日本画といった紙や絹などを支持体とする作品は、光にあたることで劣化が早く進みます。油彩作品は比較的光に対しては堅牢ですが、立体作品も含めてケースなどで保護されていない場合は、思わぬ事故によって壊れてしまう可能性も否定できません。ただ作品を残すだけなら、誰にも見せず、ずっと大切にしまっておくのが一番です。

けれども美術館では展覧会を開催します。作り手のためにもたくさんの人に作品を見ていただき、一人ひとりがその価値について考え、自由に思いを巡らせるための機会を設ける責任があるからです。地域の歴史を伝え、美術に対する関心を広げる展覧会は、ここにある作品の価値を知ってもらい、ひとりでも多くの人に大切だと感じてもらう機会でもあります。そしてこの美術館を大切に思ってくれる人がたくさん増えれば増えるほど、収蔵している作品は多くの人の手によって守られることにつながります。

そのためには来館者との接点である展覧会が、魅力的でなければなりません。行ってみたいと思ってもらえるチラシを作ること、また展覧会を見ることができなかった人や将来の人たちに向けて、記録資料としての図録を作ることも必要です。コレクションを用いたさまざまな切り口の展覧会を開催することは、ここにある作品とのつながりを多くの人に見つけてもらう手段のひとつです。

このコーナーでは実際の展覧会の準備作業の一端をご紹介します。展示室に並ぶ作品がどのようにそこに置かれているのか、輸送、展示の方法から細かな道具にいたるまで、普段は見られない展覧会の裏側をご覧ください。展示作品だけでなく、展覧会という場への関心をもっていいただければ幸いです。



## 運ぶ

所蔵作品ではない作品を展示するためには、美術館に作品を運びこむ必要があります。移動にともなう振動や衝撃、また温度や湿度などの環境の変化は、作品の破損につながる可能性があります。そのため、美術作品を運ぶときは、それぞれにあわせて頑丈なクレート（木箱）や、強度の高い三層構造のダンボール「トライウォール」製の箱（トラ箱）を作り、「美術品専用車（美専車）」と呼ばれるトラックで運びます。空調設備と、衝撃を吸収するサスペンションがついた、特別な車両です。

作品に直接触れて作業をすることを「ハンドリング」と言います。いくつかの輸送会社には、美術作品のハンドリング訓練を受けたスタッフがいて、作品輸送や美術館での展示作業にあたります。美術作品は、かたちも大きさも状態も、一つひとつ全く違うため、それぞれにあわせたハンドリングを行い、学芸員と一緒に展示方法を考えます。

彫刻など、特に重い作品は、パレットと呼ばれる木製のスノコに載せ、ハンドリフトを使って移動させます。しかしパレットから展示室の床に下ろすのは、結局のところ人の手作業です。



美術品専用車のミニカー



作品に合わせた箱を作るのは輸送のためだが、館内の移動でもできるだけ衝撃を与えないように、さまざまな工夫をして作品を運ぶ

## 展示する

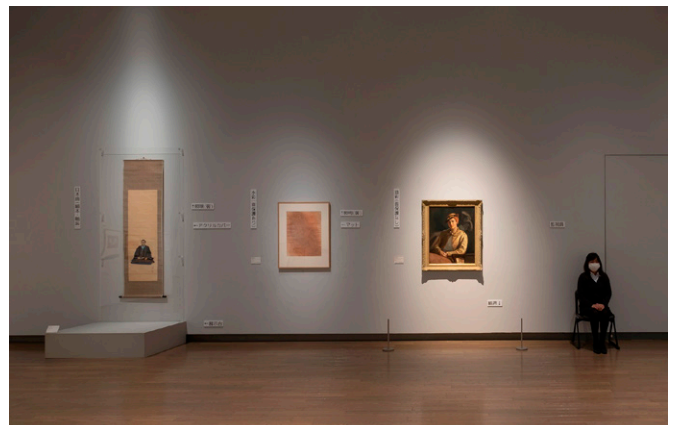
展示室では作品がいったいどのくらいの高さに壁に掛けられているのか、考えたことがあるでしょうか。同じ作品でも掛ける高さによって掛けるその印象は変わります。美術館では、展示室内での統一感を持たせながらも、展覧会のテーマや空間の広さなどを考慮して、毎回高さを決めています。

作品の展示方法は、その形状や使われている材質や技法によっても違います。たとえばガラスなどで画面が保護されていない作品の場合はカバーをつけたり、作品に触れられないように足下にテープやゴム紐の結界をはって、観覧者の注意をうながす必要があります。光の強さも作品の劣化に関わるため、使われている素材ごとに、照明の明るさを調節します。

ほかにも展示には、作品を守るためのさまざまな工夫があります。しかしこれらは、作品を見るとき邪魔にならないことが大事です。工夫の労力に気づかれることなく、「よい展示だったね」と言われることこそが、展示作業をする人にとっては最高のほめ言葉です。



展覧会によっても、作品の高さはさまざまに変えられている



左から日本画、水彩、油彩作品それぞれの展示方法と、展示室の安全を守る監視員

## 展示に関する道具



### マット

弱い紙作品を自立させ、額内でのグレージング面との接触を防ぐ。中性紙でできており、切れ端は、ケース展示資料のサイズにあわせてひとつずつ切って、作品を直接ケースに接触させないための下敷きにも使う。

### 滑り止め・テグス・ポリエステルフィルムテープ

滑り止めとテグスは彫刻や陶芸作品に使用する。ポリエステルフィルムテープ（通称マイラーテープ）は、冊子体資料のページ押さえに用いる。

### 絵画用フック

さまざまな形態があり、地震による落下、盗難防止の仕掛けがついている。

### アクリルブロック・エサフォーム

細かなアクリルブロックや、固めのスポンジ「エサフォーム」（通称エサ）を使って、展示資料の高さ・厚み調節を行う。

### 水準器

壁に掛ける作品は水平・垂直を揃えるのが基本。ここにある水準器は1996年の展覧会でロジャー・アックリング氏が用いたもので、その後、当館に「寄贈」されて現在も使用しているもの。

### V字型アクリル

冊子体の資料に挟み込んで中のページを見せる。

## 撤去と展示

この展覧会の直前まで、この展示室では「もうひとつの日本美術史——近現代版画の名作2020」が開かれていました。展覧会を入れ替えることを「展示替え」と言いますが、当館では壁面を移動させたり、展示台を準備したりして、展示内容にあわせてさまざまな作業を行っています。今回の展示替え期間は7日間。壁に掛かっていた作品がなくなり、照明器具が外され、新たな展示へと移り変わる様子を7分弱にまとめました。

<https://youtu.be/IU60xUoEsKU>





## 保存する

美術館のなかで作品を保管してあるのは、収蔵庫という場所です。24時間365日、温度と湿度を管理しています。高温高湿の環境下や温湿度の変化によって結露が生じると、作品にカビが生える可能性があり、また急激な温湿度の変化も支持体の伸縮によって絵具がはがれる原因となるからです。

展示室にも常に作品があるため、収蔵庫と同様の管理が必要です。当館では基本的に、温度22℃、湿度55%に設定しています。季節によっては、「展示室が寒すぎる／暑すぎる」という意見をいただくこともありますが、人間側が服装で体感温度の調節をするよう、ご協力をお願いしています。

作品の状態を管理するために必要なのは、温湿度だけではありません。展示室は外部につながっているため、作品にダメージを与える虫などの「招かれざる客」がやってくる可能性があります。作品にとって有害な生物を物理的に侵入させない工夫を施すことや、日々の監視（モニタリング）を行って現状を把握すること、そして人の健康にも害がある殺虫剤は必要最小限の使用にとどめることで、作品保存に適した環境を維持することができます。美術館ではこうしたIPM（総合的有害生物管理 Integrated Pest Management）と呼ばれる管理を日々行っています。

## 印刷する

展覧会には印刷物がつきものです。チラシやポスター、看板から図録まで、その多くは作品の写真を使います。一般的に4色程度のインクを用いて行う印刷は、実際の作品とはやはり似て非なるものですが、「色校正」という確認作業を通して、できるだけ実物の色に近づけます。作品はいつでも展示できるわけではありませんし、いつでも観賞できるわけでもありません。また図版によって、作品の印象が変わる場合もあるでしょう。そのためにも作品の図版は、できる限り正確に、実物の色を再現する必要があります。

そして図録は、会期が終わればなくなってしまう展覧会という場を、記録として残すためにも重要です。また調査研究の蓄積が反映された資料として、内容はもちろん図版についても後々まで参照されることになります。

当館では予算の都合上、すべての展覧会に図録を製作できないのが現状ですが、活動の記録と研究の蓄積として、できるかぎり記録物を刊行していきたいと思っています。

## 貸し出す

展覧会に際して作品を借りることがある一方、当館のコレクションも頻繁に他の美術館へ「出張」しています。各展覧会のテーマにあわせて個別の作品について貸し出しの依頼を受けることが最も多く、こうした展覧会では、その作品の新たな側面に光が当てられることになります。

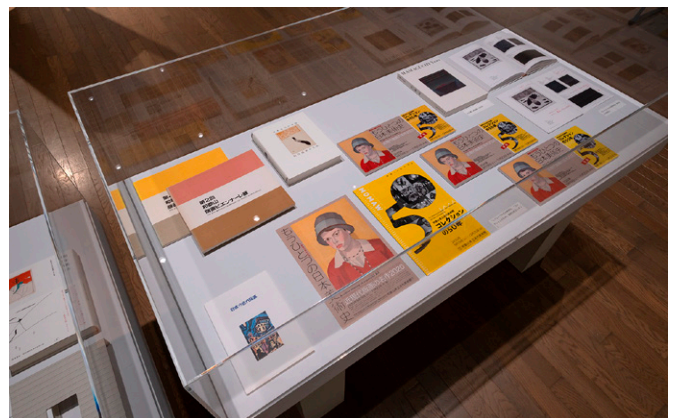
また版画など、ある程度まとまった数の作品を貸し出すこともあり、「和歌山県立近代美術館と言えば版画」という知名度は、こうした実績からも示されます。

一般に「コレクション展」や「常設展」は、いつでも見られるものとして比較的、関心を向けられにくいものですが、他の地域に行けば「和歌山県立近代美術館のコレクション」という館名を冠した「企画展」として開催されることになります。

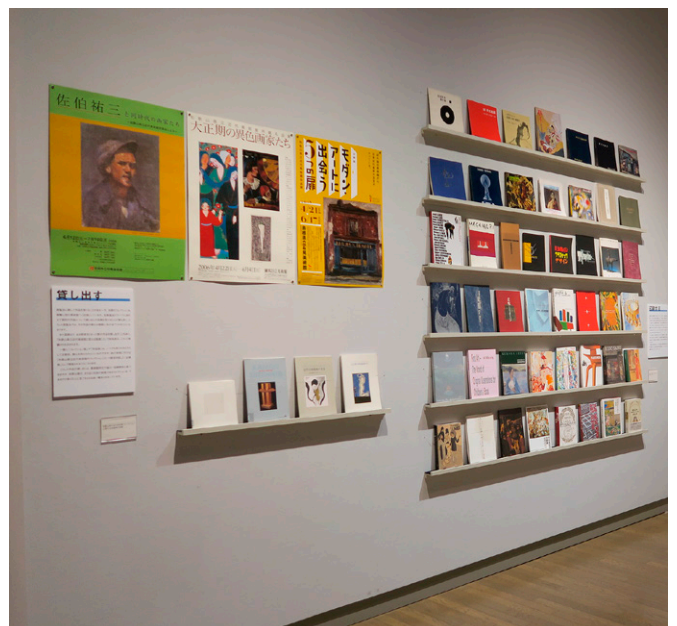
こうした作品の貸し出しは、美術館同士の協力・信頼関係に基づきますが、和歌山県の、また広く社会の財産であるコレクションを、できるだけ多くの人に見てもらえる良い機会ともなっています。



- ・左側の箱は温湿度計。温湿度はデジタルでの測定とあわせて、アナログでの計測も行う。湿度の計測は毛髪式。当館では7日間で計測する設定で、週1回、学芸員が記録紙を交換する。作品の借用時には展示室空調の安定性を証明するために、前年同時期の記録が求められることもある
- ・右側のケース内は虫害対策関係ツール。左のブラシ上の用具はシャッターに取り付け、物理的に虫の侵入を阻害する。市販のドア・窓用テープも有効
- ・右上段の丸みを帯びたものは、フェロモントラップ。特定の文化財害虫をおびきよせる誘引剤を取り付けて捕獲する
- ・下段の白いものは、粘着テープが貼られているだけのトラップ。虫の経路に設置し、侵入状況を確認する



図録や看板の色校正（ケース内右側） 撮影＝長岡浩司



まとまったコレクションを貸し出して制作された図録は、当館の所蔵作品集ともなる。右側に並ぶのは、和歌山県立美術館時代からの図録の数々



## 6. 支えるしくみをつくる

Every One of Us Supports Museum

美術館では直接に作品を扱う学芸員のほか、施設としての美術館を管理し運営する職員、来館者のみなさんに接する受付職員や展示室の監視員などが働き、それぞれが責任を果たしています。

美術館で働く人たちがそれぞれの仕事を頑張れば、もちろん館の活動は滞りなく進みますが、少し視点を広げれば、美術館はより魅力的になることもできます。例えば2015年から継続している当館のスタンプラリーは、受付職員の「ちょっとだけ得意なこと」から始まり、今ではこれを楽しみに来館してくださる方もおられます。「美術館に行こうかな」という動機を、展覧会以外でも生み出すことができた、当館独自の取り組みです。

さらに美術館という場を「美術館側／来館者側」と線引きするのではなく、多くの人が行き交う活動の場とすることで、活動はより多面的になり、地域における美術館自体の必要性も、揺るぎないものとなっていくはずです。2011年より継続して夏季に開催している「なつやすみの美術館」と題した展覧会は教育普及活動にも主眼を置き、2013年からは毎年、近隣の学校教員を中心とした有志グループと協働してワークシートを作成・配布して、多くの児童・生徒たちが来館するきっかけを作り出しています。この展覧会を通じて和歌山大学には学生サークル「美術館部」が誕生し、現在も当館で継続的に活動をしています。地域のNPO団体と協働で企画する、美術作家を招いたワークショップなども、「なつやすみの美術館」にとって、なくてはならない活動のひとつになりました。

振り返ってみれば、そもそも当館の活動の出発点には、この地域に美術館を作りたいという多くの人の思いがありました。当館では、現在も活動を継続する友の会をはじめ、当館を「わたしたちのホーム美術館」と思い、支えてくださる方が増えるような活動の種を撒き、ともに育てていきたいと考えています。



## 和歌山県立近代美術館スタンプラリー 2015-

2015年から始めた当館独自の取り組みであるスタンプラリーは、展覧会ごとに出品作品をモチーフにした消しゴムはんこのスタンプを作り、台紙に押していきます。1年間の展覧会をひとつでも多く楽しんでもらおうと、これまで50個近くのスタンプを制作してきました。実は作っているのは、受付の職員だということをご存じだったでしょうか。学芸員と一緒に作品図版を選び、どのような表現をするか、相談しながら決めています。年々そのクオリティは上がり、スタンプを集めること自体を目的にしてくださる来館者の方もいらっしゃるようです。そうしたことをきっかけに、美術館の作品と出会ってもらうことも、職員の喜びになっています。



今回、過去5年分を1年ずつに分けて額装展示した



2020年度のスタンプラリー台紙と、受付職員手彫りの消しゴムはんこ。展示室入り口で押印を担当するのは監視職員。左側にあるのは、スタンプを集めた方にプレゼントしている缶バッジで、その都度のスタンプをもとに学芸員がデザインし、製作している 撮影＝長岡浩司

## 友の会版画 1994-

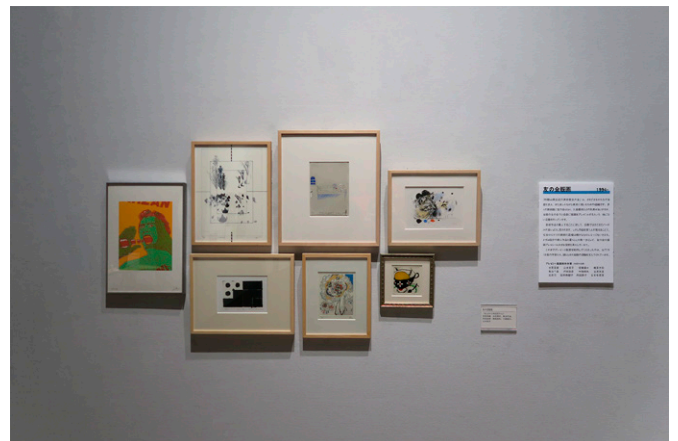
「和歌山県立近代美術館友の会」は、さまざまなかたちで当館を支え、また楽しみながら美術に親しむための組織です。多くの美術館に友の会はあり、入館優待などの特典がありますが、当館の友の会では会員に版画をプレゼントするという、他にない活動を行っています。

美術作品を購入することに対して、日本ではまだまだハードルが高いように思われます。しかし作品を買う人が増えることで、社会のなかでの美術の足場は確かなものになっていきます。まずは自分の家に作品を置くことの第一歩として、友の会の版画プレゼントは大きな役割を果たしています。

これまでプレゼント版画を制作してくださったのは、以下の12名の作家たち。彼らもまた当館の活動を支えてくれています。

### プレゼント版画制作作家（初回年度順）

吉原英雄、山本容子、安東菜々、横尾忠則、集治千晶、坪田政彦、中路規夫、吉原英里、出原司、安井寿磨子、舟田潤子、古本有理恵



これまでの友の会版画の一部



## なつやすみの美術館 2011-

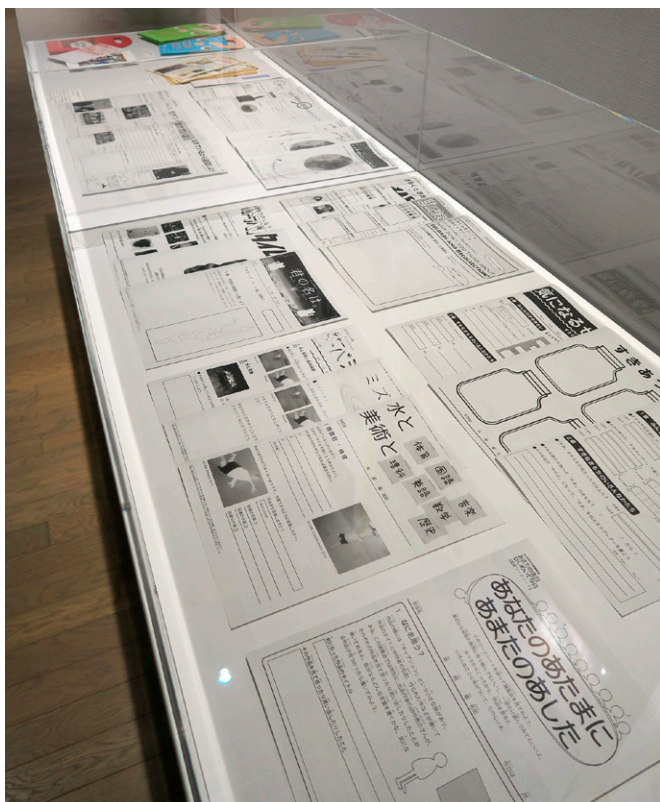
当館では2011年から毎夏、「なつやすみの美術館」展を開催しています。この展示会の出品作品は主にコレクションであり、毎回さまざまな角度からテーマを設けて、鑑賞経験を深める場としています。

2013年からは、美術館と教員を中心とした有志との集まり「和歌山美術館教育研究会」において校種別のワークシートを作成、配布することを始めました。この研究会は2011年に組織したのですが、それ以前にも県内の教育機関と協力して鑑賞カードセットを2年連続で製作した経緯があり、連携の蓄積と土台がありました。現在のワークシートは、特に近隣の中学校では夏休みの宿題として活用されており、毎年多くの児童・生徒たちが美術館を訪れるきっかけを作っています。今年はコロナ禍において活動の中断が危ぶまれましたが、リモート会議を行いながらワークシートを完成させ、展示室で配布することができました。

2015年からは、展示室の最後のエリアに、鑑賞を振り返り、アウトプットする場として「ワークスペース」と名付けた小さなワークショップスペースを設置しています。ここでは見たばかりの展示会を思い思いに振り返りながら、色紙などを使って表現することができます。さらには他の来館者の作品が別の来館者のイメージを広げるなど、個人的な鑑賞活動が有機的に連鎖していく様子が、会期が進むにつれて増えていく作品からうかがえました。今年はワークスペースを設けることができませんでしたが、リモートでも展示会に関われる方法など、新たな取り組みを始めています。

昨年からは、県内各地に出張展示を行う「おでかけ美術館」と連携し、作家を招いてコレクションの魅力を再発見する展示会のかたちを実践しています。

こうしたさまざまな活動のプラットフォームとして、「なつやすみの美術館」は今年、10年目を迎えました。



市内の中学校の多くで宿題として活用されているワークシートは、学校でプリントしても良いように、会場で配布分も輪転機で印刷。これまで校種別に作ってきたが、2020年は1種のみ作成した



これまでの「なつやすみの美術館」展のポスターやワークシートを展示したほか、スライドショーで参加者の様子を紹介した



展示会の最後に設けている「ワークスペース」は、制作兼展示のための場所



大人も子どもも一緒に参加でき、見知らぬ来館者の活動が互いを刺激する



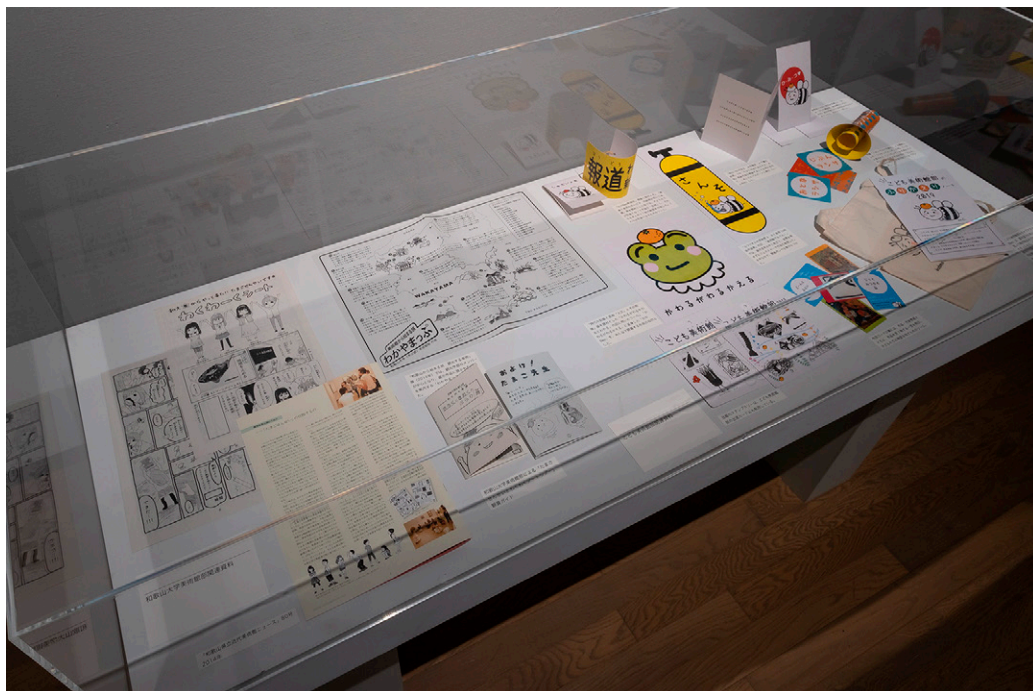
## 和歌山大学美術館部 2013/2015- こども美術館部 2016-

「なつやすみの美術館」展では、2013年に和歌山大学教育学部と連携して、学生たちが展示室でファシリテーターとして鑑賞活動をサポートする活動を行いました。1日3回、2週間にわたって来館者とトークをする活動です。翌年からは学生有志による自主的な活動となり、2015年秋には大学内に学生サークル「美術館部」が発足して、継続的な活動の足場を得ました。今年の夏は回数に制限がありましたが、一方で「なつやすみの美術館」展以外での活動も行っています。

加えて「なつやすみの美術館」展では初年度より、特に大人も子どもと一緒に展覧会楽しんでもらおうと、「こどもギャラリートーク」という取り組みを行っていましたが、2016年からは小学生限定の「こども美術館部」と題した通年の取り組みとして独立しました。ここに集まる小学生たちには何度も参加してくれるリピーターが多く、どのような展覧会であっても美術館を楽しみにしてきてくれる、当館の心強いサポーターとなっています。



別々の活動ではあるが、「なつやすみの美術館」を発端としたふたつの「美術館部」として紹介した



大学生たちによるワークシートのほか、こども美術館部のために準備したさまざまな鑑賞ツールも展示



和歌山大学美術館部による「たまごせんせいとわくわくアートツアー」では、年齢もさまざまな参加者が一緒に作品を見て、多様な意見を共有する



小学生だけで鑑賞する「こども美術館部」。見る楽しさを知った彼らの多くは、何度も来館するリピーターになっている



## 地域 NPO との連携 2002-

和歌山市内のNPO 団体和歌山芸術文化支援協会（略称 wacss : ワークス）は、2002 年より当館と連携した活動を行ってきました。特にアーティスト・イン・レジデンス（滞在型の作品制作）やアーティストを招いたワークショップの活動では、開催中の展覧会とも関連させた事業を実施しています。

ここで一例として紹介する「リヤカーカメラ」は、1 階（「コレクションの50 年」展）でも作品を展示していた佐藤時啓氏と wacss、そして当館が継続して行った活動の成果です。「リヤカーカメラ」とは、その名の通り「リヤカー」に載せた「カメラ（・オブスキュラ）」で、佐藤氏が考案したものです。バイクや自転車で牽引して走ると、中の白いテーブルに外の景色が動画として映し出されます。

wacss と当館は2009 年から2013 年にかけて、複数回にわたって佐藤時啓氏を招聘してきました。2010 年には佐藤氏が田辺市中辺路町にツリーハウスカメラを制作、そこを訪れながらカメラに関わるさまざまな体験活動を行ってきました。2013 年には、ツリーハウスカメラを解体する必要が生じましたが、その廃材を用いて生まれ変わったのが「リヤカーカメラ」です。そして今度は美術館や近隣の学校での、「リヤカーカメラ」を用いた体験ワークショップへと展開しました。

こうした活動は、作家、NPO、美術館に加えて、さらに受け入れ先の学校、近隣のカメラ店、ボランティアの方々など、さまざまな人の力で支えられています。



中に入ることができるカメラ・オブスキュラ「リヤカーカメラ」



田辺市中辺路町に制作したツリーハウス型のカメラ・オブスキュラ。これを解体して「リヤカーカメラ」を制作した



リヤカーカメラの中に入った子どもたち。扉を閉じると白いテーブルの上に、外の景色が「動画」として映し出される



リヤカーカメラの体験と展覧会、青焼き写真の制作を組み合わせたワークショップ。作家の佐藤時啓氏の複数年にわたる協力に加え、技術を持ったカメラ店の方、ボランティア、それを取りまとめるNPO との連携で実現した





## 7. これまでとこれから

So Far, and Far Off

当館が50年という時間をかけて集めてきた近代の美術、国内では明治時代以降に作られた作品や資料の蓄積は、和歌山県という行政組織が生まれてからの150年とも重なり、すでに歴史としての重みを感じさせます。和歌山という地において、この期間の、そしてこの先の人間の文化的な営みを、美術作品そのものと美術を通じた視点から残し、それらを通じたさまざまな学びと議論の場を設けていくことが、これからも変わらない当館の仕事です。

一方で、ミュージアムは変わらなければならないという議論もあります。展示会の冒頭に紹介したICOM（国際博物館会議）の規約に記されたミュージアムの定義は、これまでも何度か改正されてきました。特にここ数年は、作品や資料保存というモノ中心の考え方から、より積極的に社会の課題に対して働きかける存在となるべきだという姿勢への、大きな方針転換についての議論が生まれています。その背景にはSDGs（持続可能な開発目標）に対するミュージアムの責任と、民主的な社会の継続に対する危機意識の高まりがあり、議論は今も続いています。

世界にあるミュージアムのひとつとして、50年の活動を経た当館が果たすべき役割は、まずはこの先も安定して活動が続けていくことです。地域の記憶をとどめ、その文化と教育を担う機関として、作品や資料を守り、すべての人たちに開かれた学びの場としての存在であり続けることが大切な使命です。日本の一地域にあるミュージアムが、そのアイデンティティを守ることは世界の多様性を保証することにもつながるからです。

そして当館のアイデンティティは、これまで見てきたように、地域とのさまざまな関わりに拠っています。言い換えれば、当館が果たすべき持続可能な社会への目標（SDGs）は、みなさんの日々の生活とつながるということです。当館を大切に思ってくださいの方が増えるのはもちろん、ただ気軽に来館していただくことも、和歌山県立近代美術館の、さらには世界のミュージアムのサステナビリティにつながっています。

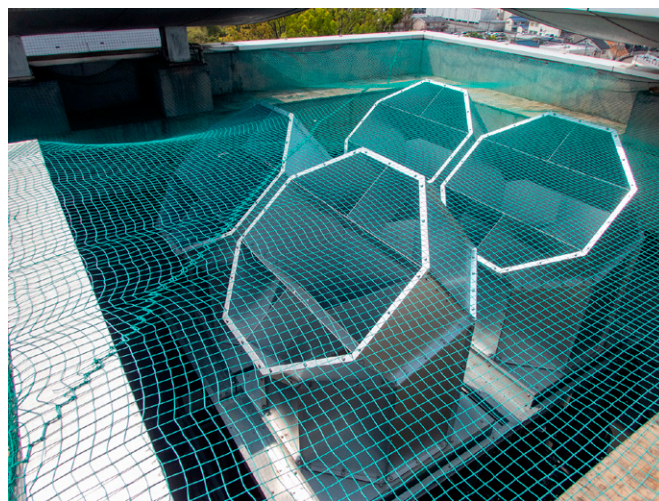


## 箱を維持する

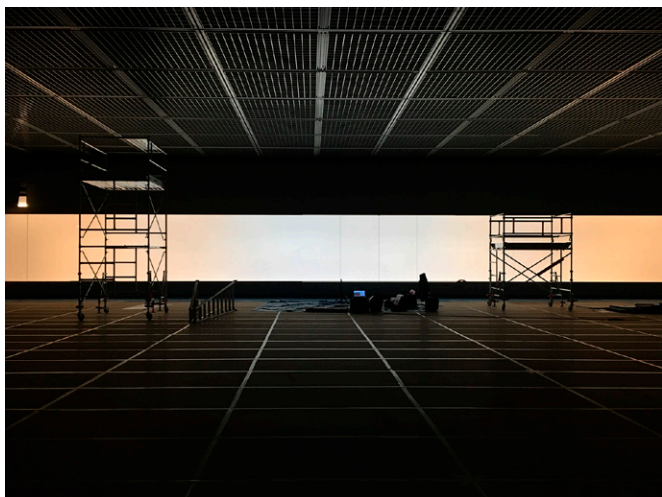
収集した作品や資料を後世に伝えるために、また多くの人の学びの場となるために、箱としての美術館を維持することは必要です。特に作品保存に大きく関わる温度と湿度を調整する空調は、24時間365日動かし続ける必要があり、一昨年、改修工事を行いました。

展示室の照明機器も、私たちが作品を楽しみながら、作品の劣化を抑えるバランスが求められます。そのためには照度を微妙にコントロールすることが必要です。一方で、照明は大きなエネルギーを使います。近年、開発が急速に進んでいるLED照明は、消費エネルギーを抑え、さらには作品を傷めない低い照度でも、見やすさを実現できるようになりました。昨年度はこの2階の展示室を、そして来年1月からは1階展示室の照明機器入れ替え工事を行います。

開館して26年を迎えたこの建物は、空調や照明以外にも、さまざまなメンテナンスを必要としています。周辺の環境との共生を図る意図を持って計画され、また多くの人に親しまれてきたこの建物を、長く守り続けていけるよう、努力していきます。



空調機器入替工事 (2018–2019年)



展示室照明機器入替工事 (2019–2021年)



## あなたの「和歌山県立近代美術館」

和歌山県立近代美術館のこれまでの50年は、さまざまな人の活動や学びによって支えられてきました。そしてこれからも、この美術館の活動について目を向けてくださる方がいることが、当館にとっての財産でもあり、当館の、またミュージアム全体のサステナビリティを支えていきます。今回の展覧会の最後のコーナーには、和歌山県立近代美術館のこれからについて考えるために、みなさん一人ひとりの小さなエピソードや思い出を教えてくださいました。

印象に残っている作品や展覧会、またそれらに関わる個人的な記憶、あるいはこの美術館に関わる思い出などを、テーブルにおいてある用紙に記入して、水色のポストに当館してもらい、それらは展示室の壁面に掲出しました。ここではその一部をご紹介します。

(なお、会期終了後も館内およびウェブでの募集を継続したため、1月に投稿されたものも一部掲載しています。)



2020年12月1日 大学4年生

高須光治という画家の自画像が大変リアルティがあるように見えて、印象に残っています。今回の(1階の)展示では、福岡道雄の《石を落とす》が何だかわいらしく、でも精巧に作られていると感じ、印象に残っています。

2020年12月2日 おとな

昔つきあった彼女とアンジェ美術館展を観にきました。今日はこのポスターを見てとてもなつかしく思いました。

2020年12月3日 おとな

関東に10年暮らした後、和歌山に帰ってきました。ほどなく訪れた近代美術館で田中恭吉の版画を見て、帰ってきて良かったと思いました。

2020年12月4日 小6

世界にはこんなすごい作品がたくさんあるんだと思いました。

2020年12月4日 小4

次のてらんかい楽しみにしています。

2020年12月5日 おとな

イームズ展、森のなかで、藤本由紀夫展などが思い出深いです。1才の娘と初めて来ました!

2020年12月6日 5さい

いろんなとたんけんした

2020年12月6日 おとな

とても良い思い出に。毎月来ようか。来たいね。

2020年12月6日 おとな

2001年頃から来館しています。絵本の原画展、山本容子展、西村伊作展、ポスターが懐かしかったです。2019年はミュシャ【と日本、

日本とオルリク]展の後、京都文化博物館へも行きました。「動き出す!絵画」展から4年たっているのも再確認しました。

2020年12月6日 おとな

私自身が持続可能であるために和歌山県立近代美術館は不可欠な存在です。コロナ禍で予約制を導入している美術館もありますが、行きたいと思った時にふらりと立ち寄れる美術館であってほしいと願っています。

2020年12月9日

展示のしかたがよくわかった  
ステキな場所  
もっとたくさんの人が美術館に足を運ぶ  
そんな人が増えていく  
一見ムダに見えるものこそが心を豊かにしているのだと思う

2020年12月12日 おとな

あの展覧会から2年もたっていたとは。こまったなあ。

2020年12月12日 おとな

初めてこの美術館に入った時、誰もいない展示室の中で、佐伯祐三の名作に出会った時の感動は忘れられない。大阪出身の佐伯祐三の名作が10点以上も和歌山に存在していることが、今も不思議に思えてならない。

2020年12月12日 おとな

浜松から今回の展示を見るために5時間かけてやってまいりました。私は美術館ではありませんが、やはり地方の「館」のつく場で働いています。まだ日は浅いので、ミュージアムについて何かを語るなどとてもできませんが、ミュージアムとは何か、今、自館でできることは何か、自館が浜松にある意味は何かを考えています。今日こうしてこちらのコレクションを1階で鑑賞

し、2階で「美術館を展示する」を拝見し、ここに美術館が存在する意味と、これからもここにあり続ける意味をまさに「自問」しながら、来館者とともに考えたいという思いが強く伝わってきました。答えは見つかりませんが、大切にしなければいけない思いは見つけたように思います。ありがとうございました。

2020年12月13日 小4

消しゴムはんこのクオリティに、とてもおどろきました。とても細かいのにすごいですね。私だったら、あんなに細かいさぎょうはすぐいやになってしまうと思います。今日はとてもおもしろかったです。ありがとうございました。羊の作品、さわりくなりました〜。

2020年12月13日 おとな

2015年春から(毎回)通い続けています  
今後もよろしく

2020年12月14日 おとな[Web投稿]

和歌山を離れて20年以上経ちますが、帰省時に娘を連れて帰るようになってから、毎回美術館に行くようになりました。博物館と美術館と奥山公園とを駆け回るためにです。父(私)も企画展示と常設展示を楽しめますし。和歌山でもこんなにきっちりとした近代美術を見れることを、高校時代の自分に知らせてあげたいと思いながら、毎回帰省時には楽しみにしています(今年は帰省できませんが)。

2020年12月16日 おとな

一覧に展示されたポスターを見ると、「これ見に来たな」という思い出といっしょに、「あの人と来たな」がよみがえってきました。「学生の頃、先輩達と来たのがなつかしいです。その先輩はアート好きで、色んな展示を見に行ってる方でしたが、「近代美術館が好き」と言っていて、それ以来、ひいき目で見ています笑

## 2020年12月17日 おとな [Web 投稿]

就職してまもない頃に、同業の友人たちと一緒に美術館を訪れ、スタッフの皆さんに温かく迎えてもらったことが印象に残っています。その後も何度か訪れていますが、いつもお邪魔してもすみずみまで神経の行き届いた展示だなあと感じます。とても居心地の良い美術館です。

## 2020年12月18日 おとな

初めて来ました。なかなかよい「クセ」です。今後チェックします。笑

## 2020年12月18日 おとな

第1回ビエンナーレ展・・・サム・フランシスが審査員!酒井哲朗氏のお名前も発見。50年の重みを味わいました。

## 2020年12月19日 おとな

黒田清輝展 中学生の頃、夏休みに母と弟と3人で見に来たことを思い出します。2018年から欠かさず来るようになりましたが、どのポスターを見てもなつかしい気持ちでいっぱいになります。いつも美術館の外に出た後、作品の意味を考えたり、学びを深めています。

## 2020年12月19日 おとな

僕よりも少し年齢の上の美術館。好きな時にふらっと来てその時は今もよくわかっていない。帰ったらもう忘れてる。でも多分記憶のどこかにあって、僕のイメージの基にもなってるかもしれないな。大人になってからしか美術館・博物館はたくさん感慨深い場所になったと思う。コンサートとかにも来るし、1Fのお店を見るだけでも来る。結構多くの人が働いていますね。また気が向いたときにふらっと来ますね。

## 2020年12月20日 おとな

美術館も美術品として保全してください。

## 2020年12月20日 中3

もうづくし展楽しかった!!

## 2020年12月20日 おとな

美術館ができた時、うれしくて夜散歩に来たりしました。特に屋外の舞台になっているところがお気に入り、勝手に夜楽器を演奏しに来たりしました。

## 2020年12月20日 おとな

「日本画の冒険」・・・正確な展覧会名がはつきりませんが、忘れられません。日本画に対して持っていた既成概念をひっくり返された展覧会でした。作品も面白いものばかりでした。生誕120年記念の田中恭吉展もよかったです。図録も素敵で、今も時々見返します。学芸員の方のトークがすごく面白いので、なかなか来られませんが、また参加させていただきたいです。

## 2020年12月20日 高2

この「美術館を展示する」という展覧会がすごく良いなと思いました。私自身、美術館が大好きで、いろんな所に足を運んでいます。この展覧会は新しいなと思いました。今、美術系の高校に通っていて、将来は学芸員になりたいと思っているのですが、最近すごく迷うところがあって。でもこの展示をみて、やっぱり学芸員になりたいなと思いました。和歌山県立近代美術館には初めて来ましたが、また来たいと思いました。

## 2020年12月20日 おとな

県民みんなで美術館を大切にしていきたいと思いました。

## 2020年12月20日 おとな

これでもか!というくらいに版画と昔の印刷物が出ていた展覧会が最も印象的。あと、駅まで歩いて帰ったなーとか。

## 2020年12月20日

I really love the originality of the works displayed. Art is a way of communicating the past to the present, without words. This exhibition communicates effectively.

## 2020年12月20日 おとな

懐かしい三年坂の写真を見ながらこの美術館の歴史を感じました。変わらずそこにあり続けることも大切なことだと感じます。目新しさではなく、ものの価値を様々な視点で提案してくれる場だと思っています。

## 2020年12月20日 おとな

今回初めて訪れました。空間の穏やかさ、美しさに救われる気分になりました。ありがとうございます。展示の説明パネルは、とてもすなおで、美術館に関わる方の愛が伝わってきました。

## 2020年12月22日 おとな [Web 投稿]

50周年おめでとうございます!嬉しくて友の会に入会し山本容子の版画を頂きました。書棚に見える最初の和歌山県立美術館の図録は1989.10.07の「親と子でみる世界の名画展」子供と一緒に。びっくりしたのは1996.08.03のプーシキン美術館展、更にガガーリンのお嬢様が来館し、お話が聞けたこと(ロシア語は分からずですが)有難かったのは2009.09.08の「自宅から美術館へ田中恒子コレクション」が一歳二か月の孫の美術館デビューになった事です。抱っこしての鑑賞でしたが、気に入ったのか長い時間を過ごしました。サスティナビリティ展覧会の展示の「ポスターと長い展覧会の年譜」は一気にその時代へといざなってくれ、感無量でした。せめて一年間でも展示を続けて欲しい!ホームページに載せて頂ければ。

## 2020年12月 おとな

和歌山県立近代美術館は身近で肩肘張らず入れる近い存在です。

## 2020年12月 おとな

生後半年の息子といっしょに2014年の「なつやすみの美術館」へうかがいました。まだぼんやりしているだろう視覚で《どんまいQちゃん》をいぶかしげに見ていたのをよく覚えています。私はといえば、久しぶりの展覧会で作品を目にすることができ、とても感動したのをいまでも印象深くおぼえています。

## 2020年12月 大学3年生

大親友が東京から会いに来てくれました♡ だいすきな場所になりました

## 2020年12月 おとな

50年の美術館の歩み、すばらしいです。たくさん作品をこれからも見せてください。

## 2020年12月 高1

永遠の小学生として、「こども美術館部」に来たいよね〜

## 2020年12月 高1

Qちゃんトミカの串カツと石のスポンジが好きです。

## 2020年12月 おとな

たぶん今から30年前、まだかけ出しだったころ、この美術館に来ました。何を見たかは忘れましたが、来たことだけははっきり覚えています。あれから長い仕事生活を終え、今年コロナ禍の中、また来れたことに感謝です。

## 2021年1月3日 おとな [Web 投稿]

初めて授かり無事生まれてくれた我が子と、コロナ禍でやっと孫と対面できた家族との時間を、美術館で過ごすことができました。

## 2021年1月5日 大学4

高校の課題で夏休みに展示をみにきた記憶があります。色がたくさんある作品に惹かれて、鑑賞文書きました。

## 2021年1月5日 大学4

今日はとても寒いですが、高校か中学の夏休みに宿題として訪れた記憶があります。自転車で汗だくになったので、涼しい館内でポーっとしました。

## 2021年1月5日 大学4

小さいころ、祖母と妹とよく来ました。幼い妹がよく脱走していたのがなつかしいです。今度また、3人でこれたらよいと思います。

## 2021年1月6日 おとな

コロナ禍・・・大阪から友人と車で来ました。来てうれしい!!開館してうれしい!!そういう場があることに感謝!!



2021年1月10日 小4

浜口陽三さんの絵が好きなので、たくさんかざってほしいです。「14このさくらんぼ」をまた見たいです。

2021年1月11日 おとな

展示が新しくなるたびに来ているのですが、とても居心地が良くて毎度楽しみにしています。

2021年1月11日 おとな [Web 投稿]

「和歌山県立近代美術館中毒とわたし」  
セクシーなウサギのオブジェのバリー・フラナガン、人間の耳ばかりをつくった三木富雄、ザ・アメリカといった風景を切り取ったジョージ・シーガル!私の一押しは村井正誠。

なんてマニアックな逸品が、さり気なく展示されているんだ!

ほかの都市の美術館はつーんとすまして展示されている。見るこちら側が恐れ多く拝見させていただいている感じがする。

ところがここは、明らかに異空間なのに、さり気ない雰囲気です。「ゆっくり見ていきな〜よ」と「展示しちゃ〜る」のだ。しかし見落としてはいけない。何でも出てくるのだ。美術マニアを自負するが、収蔵作品が面白い。奈良美智、バスキアまで出てくる。何なんだ!この面白さは!!

そして何度同じ作品を見ても、展覧会の切り口が変わると見え方も変わってしまう! 25年以上通うと「ああ、またお会いしましたね」という作品も多いのに、また来てしまう中毒性のある美術館なのだ…。

心憎いぜ!和歌山県立近代美術館!!

2021年1月11日 大学4

みかんを買うついでにふらっと寄ったのですが、想像以上にステキ!《煙》はなぜあんな絵なんだろう。理由が知りたくなりました。

2021年1月15日 5さい

おかあさんときた

2021年1月16日 小3

ともだちとあそびました。てんこうしてしまってさびしいです。

2021年1月21日 小6

この美術館はとても配置がきれいで、見学者の思いを引き立たせてくれる。

2021年1月21日 小4

私が最初にこの美術館にきたのは「すききらい、すき? きらい?」でした。日の丸弁当の作

品は、とってもてておいしそうだったです!またこの美術館に何十回もきます!

2021年1月 おとな

和歌山を離れて40年弱経てしまいました。その間、墓参を兼ねて貴館を何回か訪れました。その中で「田中恭吉」展?でありましたか、愁いを含む表現に自らを投影し感動を覚えたのを記憶します。

2021年1月 おとな

毎回楽しみにしています。同じ作品でもその時々で感じるものが違うのがわかるのは、地元の美術館で何度も通うことができるよさです。そしてその時々で、いろんな発見や気づきが起ころのは、何にも変えられない喜びです。

2021年1月 おとな

「リアルなリアルなリアルな」以来、毎回来ています。1万点の収蔵品の中から、らしいもの、めったに出さないものをこれからも見せてください。

2021年1月 おとな

こんな美術館が普通に街にある事がうらやましいです。

